

主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設（改良）工事予定地

内埋蔵文化財発掘調査報告書

# 古城山遺跡

（Ⅰ・Ⅱ区調査区）

2006年3月

島根県松江土木建築事務所

東出雲町教育委員会

主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設（改良）工事予定地  
内埋蔵文化財発掘調査報告書

# 古城山遺跡

（Ⅰ・Ⅱ区調査区）



2006年3月

島根県松江土木建築事務所

東出雲町教育委員会

## 序

東出雲町教育委員会では、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、平成15年度から主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設（改良）工事に伴う古城山遺跡の発掘調査を実施しました。

古城山遺跡は、東出雲町大字出雲郷地区にある、意宇平野を西に望む低丘陵の尾根上に位置しています。今回、発掘調査を行ったのは、この遺跡の全域ではなく、調査区の西側にあたる古城山遺跡Ⅱ区全面と古城山遺跡Ⅰ区の一部であるA・B地区の調査区です。今回の古城山遺跡発掘調査では、横穴墓1基をはじめ、竪穴住居跡2棟、加工段や古道など様々な遺構が検出され、それに伴う多種多様な遺物が出土しました。

これらの遺構・遺物は、意宇平野を中心として展開した古代出雲の歴史を解明していくうえで貴重な研究資料となることと思います。

本報告書は、このような発掘調査の成果をとりまとめたものですが、広く各方面においてご活用いただき、埋蔵文化財に対する理解と関心を高めていただければ幸いです。

最後にこの調査を実施し、本書を刊行するにあたって、ご尽力いただきました島根県松江土木建築事務所並びに島根県教育庁文化財課、ご協力を賜りました地域住民の皆様はじめ関係者の方々に衷心より厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

東出雲町教育委員会  
教育長 鞆嶋弘明



## 例 言

1. 本書は、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、東出雲町教育委員会が平成15年度・16年度・17年度に実施した、主要地方道大東東出雲線新世紀道路建設（改良）工事予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次のとおりである。

古城山遺跡 島根県八束郡東出雲町大字出雲郷1816番地3外  
調査面積 3157.41 m<sup>2</sup>

3. 調査組織は次のとおりである。

平成15年度 現地調査

調査主体 東出雲町教育委員会 教育長 鞆嶋弘明

調査指導者 田中義昭（元島根大学法文学部教授）

東森 晋（島根県教育庁文化財課）

事務局 越野幸二（教育次長）

調査担当者 松本 浩（社会教育課主任主事）

作業員 石倉省二 石倉春枝 石倉充枝 石原隆代 小竹沙代子 近藤絹枝

近藤静代 田部 茂 永島雄三 奈良井崇夫 引野 温 本田真人

前島春枝 前島康満

平成16年度 現地調査

調査主体 東出雲町教育委員会 教育長 鞆嶋弘明

調査指導者 田中義昭（元島根大学法文学部教授）

丹羽野裕（島根県教育庁文化財課）

東森 晋（島根県教育庁文化財課）

今岡一三（島根県埋蔵文化財調査センター）

広江耕史（島根県埋蔵文化財調査センター）

事務局 越野幸二（教育次長）

調査担当者 松本 浩（社会教育課主任主事）

調査補助員 安部和幸（臨時職員）

作業員 飯塚堆博 石井利次 石川 登 石倉省二 石倉春枝 石倉正喜

石倉充枝 石橋 強 石原隆代 上田安子 小村かず子 小竹沙代子

近藤絹枝 近藤静代 佐々木洋子 佐藤 公 佐藤美枝子 妹尾史章

田中節子 田部 茂 長島延子 永島雄三 奈良井崇夫 引野 温

広江 礼 藤田勝美 細田美智子 細田美晴 本田真人 前島春枝

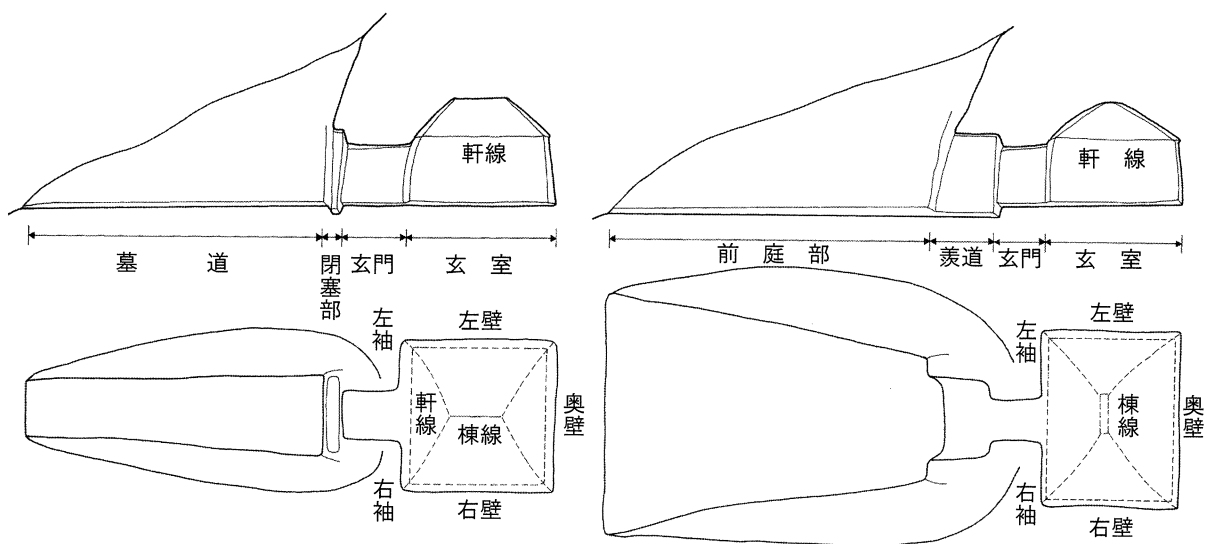
前島康満 三宅大樹 大和 宏 吉野 勉

平成17年度 現地調査・報告書作成

調査主体 東出雲町教育委員会 教育長 鞆嶋弘明

調査指導者 原田敏照（島根県教育庁文化財課）  
 事務局 （～6月30日） 越野幸二（教育次長）  
 （7月1日～） 野々内誠（教育次長）  
 調査担当者 松本 浩（社会教育グループ主任）  
 整理作業員 深津光子（臨時職員） 原田房枝（臨時職員） 勝部初美（臨時職員）  
 作業員 石倉省二 石倉春枝 石倉充枝 石原隆代 小竹沙代子 近藤静代  
 田部 茂 永島雄三 奈良井崇夫 本田貞人 前島春枝 前島康満  
 大和 宏

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）  
 西尾克巳（島根県教育庁文化財課） 三宅博士（元安来市和鋼博物館）  
 浅沼政誌（島根県古代文化センター） 東森市良（島根県文化財保護指導委員）  
 川上昭一（松江市教育委員会）
5. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本書に掲載した「古城山遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25000）」は東出雲町管内図を使用し、「古城山遺跡試掘トレンチ配置図」（1:2000）は島根県松江土木建築事務所の工事図面を浄書して使用した。
8. 本遺跡出土遺物及び調査記録は東出雲町教育委員会で保管している。
9. 本書では、検出した横穴墓の各部については下図のように示した。



横穴墓模式図と各部名称

# 本文目次

第1章	位置と環境 .....	1
第2章	調査に至る経緯と発掘調査の経過 .....	5
第3章	遺跡の概要 .....	7
	第1節 I区調査区 .....	7
	第2節 II区調査区 .....	22
第4章	まとめ .....	29

## 挿図目次

第1図	古城山遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図	古城山遺跡調査区配置図	6
第3図	I区遺構配置図	8
第4図	I区SI01・加工段2実測図	9
第5図	I区SI01出土遺物実測図	9
第6図	I区加工段1実測図	10
第7図	I区加工段1出土遺物実測図	10
第8図	I区加工段3・4・5・6実測図	11
第9図	I区加工段6出土遺物実測図	12
第10図	I区横穴墓実測図	13
第11図	I区横穴墓玄室内遺物出土状況実測図	14
第12図	I区横穴墓玄室内出土遺物実測図（須恵器・刀子）	15
第13図	遺構外遺物出土状況	16
第14図	古山道出土土師質土器実測図	17
第15図	遺構外出土弥生土器実測図	19
第16図	遺構外出土須恵器実測図	20
第17図	遺構外出土陶磁器実測図	20
第18図	遺構外出土石器実測図	20
第19図	遺構外出土宝篋印塔実測図	20
第20図	II区遺構配置図	21
第21図	II区SI01実測図	22
第22図	II区SI01出土遺物実測図	22
第23図	II区加工段1・2実測図	23
第24図	II区SK01実測図	25
第25図	II区SK02・03・04・05・08実測図	26
第26図	II区SK06・07実測図	27
第27図	II区SX01実測図	28

## 写真図版目次

図版1	上：I区調査区全景 下：I区調査区全景
図版2	上：SI01 下：加工段1



- 図版3 上：加工段2  
下：加工段3～6
- 図版4 上：加工段3～6  
下：加工段3～6
- 図版5 上：横穴墓全景  
下：横穴墓羨門部
- 図版6 上：横穴墓玄室内遺物出土状況  
下：横穴墓縦断面土層堆積状況
- 図版7 上：古山道  
下：作業風景
- 図版8 上：SI01 出土遺物  
中：加工段1 出土遺物  
下：加工段6 出土遺物
- 図版9 横穴墓玄室内出土遺物
- 図版10 古山道出土遺物 (1)
- 図版11 古山道出土遺物 (2)
- 図版12 遺構外出土遺物
- 図版13 上：Ⅱ区調査区全景  
下：Ⅱ区調査区全景
- 図版14 上：SI01  
下：加工段1・2
- 図版15 上：SK01  
下：SK02
- 図版16 上：SK03・04・05  
下：SK06
- 図版17 上：SK08  
下：SX01
- 図版18 上：作業風景  
下：SI01 出土遺物



## 第1章 位置と環境

古城山遺跡のある島根県八束郡東出雲町は、島根県の東部に位置する。西は松江市、東は安来市と接しており、近年の宅地造成や産業施設誘致などの結果、島根県で有数の人口増加の町となっている。南側には東出雲町で最も高い京羅木山（473m）を始めとする山々が連なり、そこから派生する低い丘陵地が至るところに伸び、いくつかの谷を形成する。町の北側には中海が広がり、平地はそれに面して広がっており、人口の大半がここに集中する。町の西側、松江市との境には意宇川が流れ、中海に注いでいる。その意宇川の流域には意宇平野が広がり、出雲地方有数の穀倉地帯として知られている。意宇平野はかつて出雲国庁、出雲国分寺などが置かれ、古代出雲地方の政治・文化の中心地として栄えていた地である。その意宇平野を西側に眺望し、北側に目を移すと中海が一望できる標高30m前後の低丘陵上に今回発掘調査を行った古城山遺跡は存在する。同一の丘陵には古城山古墳群や古城山横穴群、古城山城跡など周知の遺跡が、さらに近辺の丘陵上には姫津古墳群、栗坪古墳群など古墳、横穴を中心に数多くの遺跡があり、意宇平野東端にあたり、古代山陰道に推定される古城山周辺は古くから交通の要衝として重要な役割を持っていた地域であった。

この古城山周辺を中心とした、時代別の遺跡の概要を以下で述べたい。

### 縄文時代

町内からの縄文時代の遺跡としては、古城山からも程近い地に竹ノ花上遺跡がある。ここからは前期から晩期にかけての土器が出土している。その他、春日遺跡から晩期の土器、大木権現山から晩期の土器片を含むピットが検出されている。安来道路建設の際、行われた鶴貫遺跡の調査では後・晩期の土器が出土して、さらに当時の中海の海岸線と推定される土層が確認された。

### 弥生時代

町の東端にある磯近遺跡から底部に粃殻痕の付着した土器が検出された。春日遺跡、夫敷遺跡では水田跡が検出されていることなどから、稲作農耕が当時既に行われていたことがわかる。磯近遺跡からは完形壺形土器、打製石斧、敲石、土錘が出土している。寺床遺跡からは、前・中期の竪穴住居跡が検出された。後期末になると、四隅突出型墳丘墓の可能性をもつ大木権現山1号墳が築造された。

### 古墳時代

古墳時代になると、縄文、弥生時代に比べ、遺跡数は増大する。町内では特に古墳、横穴などが数多く存在する。寺床1号墳は、出雲地方を代表する前期古墳である。主体部は大規模な礫床構造をもち、副葬品で鏡、勾玉、鉄剣、大刀などが検出された。この他、船載の内行花文鏡が出土した古城山2号墳がある。中期になると、埴輪片、三連櫛が出土した箱式石棺をもつ大木権現山2号墳、岩盤を舟形に削り貫いて作られた主体部をもつ春日岩舟古墳などがある。後期になる

と栗坪古墳群、内馬池横穴群、渋山池古墳群、高井横穴群、焼田古墳群といった群集墳が町内の様々な丘陵地に作られた。そのうち栗坪古墳群の石棺式石室をもつ古墳や内馬池横穴群の四柱式の天井をもつ横穴など様々な形態の墳墓がこの時代に作られた。近年本町で調査した下中意東古墳では横穴式石室が検出され、岩屋1号墳では30m程の前方後方墳の墳丘の一部を検出した。古墳以外でも勝負遺跡、四ツ廻Ⅱ遺跡では玉作工房跡が検出されている。原ノ前遺跡、渋山池遺跡など住居跡が町内のいたるところから確認されている。

#### 奈良～平安時代

上述の出雲国庁、出雲国分寺はこの時代になって意宇平野周辺に作られた。意宇平野には条里制が敷かれていたことが過去の航空写真から推定できる。またこの時代に全国各地に作られた経塚も町内にいくつか存在する。

#### 鎌倉～室町時代

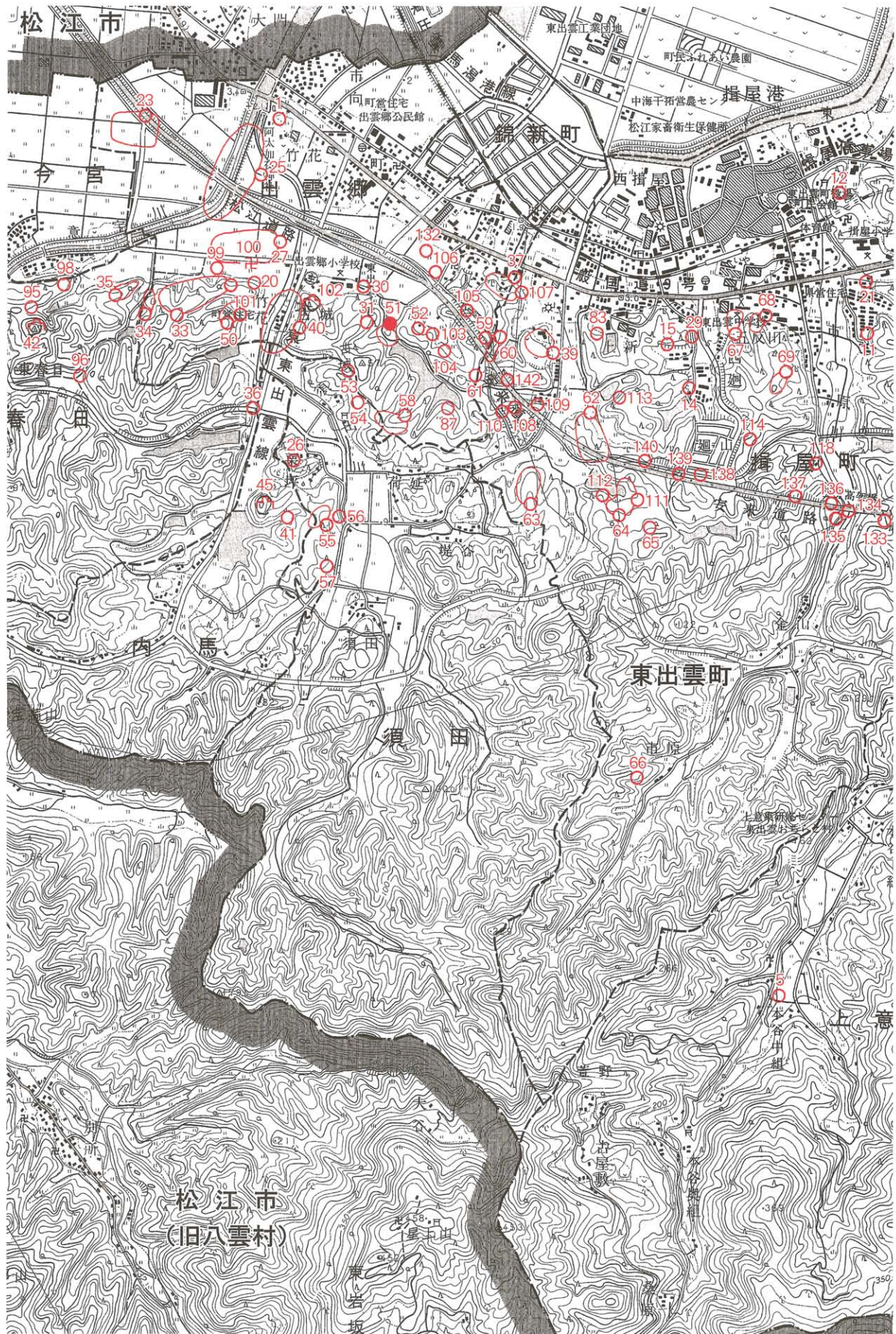
古城山という名前が示すとおり、本遺跡周辺には、古城山城跡がある。この城は砦として利用されていたと考えられ、郭の跡や井戸が残されている。その他、福良城跡、京羅木山城跡など尼子氏と毛利氏の激しい攻防戦があった城跡が町内各所に残っている。またこの時期の古墓と考えられる五輪塔がいくつかあるが、その詳細が不明なものが多い。

#### 江戸時代以降

江戸期の天宝年間頃のわずかな期間に意東焼という陶器が盛んに作られていた。現在、その窯跡は残っていないが、多数の陶器片が窯跡周辺には残っている。

#### 参考文献

- 東出雲町誌編纂委員会 『東出雲町誌』 1978年  
東出雲町教育委員会 『東出雲町の遺跡』 1988年  
島根県教育委員会 『一般国道9号安来道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅷ』 1997年  
島根県教育委員会 『一般国道9号安来道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅺ』 1998年  
東出雲町教育委員会 『寺床遺跡調査概報』 1983年  
東出雲町教育委員会 『岩屋1号墳・中意東遺跡』 1995年  
東出雲町教育委員会 『大木権現山古墳群』 1979年



第1図 古城山遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 : 25000)

古城山遺跡周辺の遺跡一覧表(番号は島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)に掲載された番号に対応)

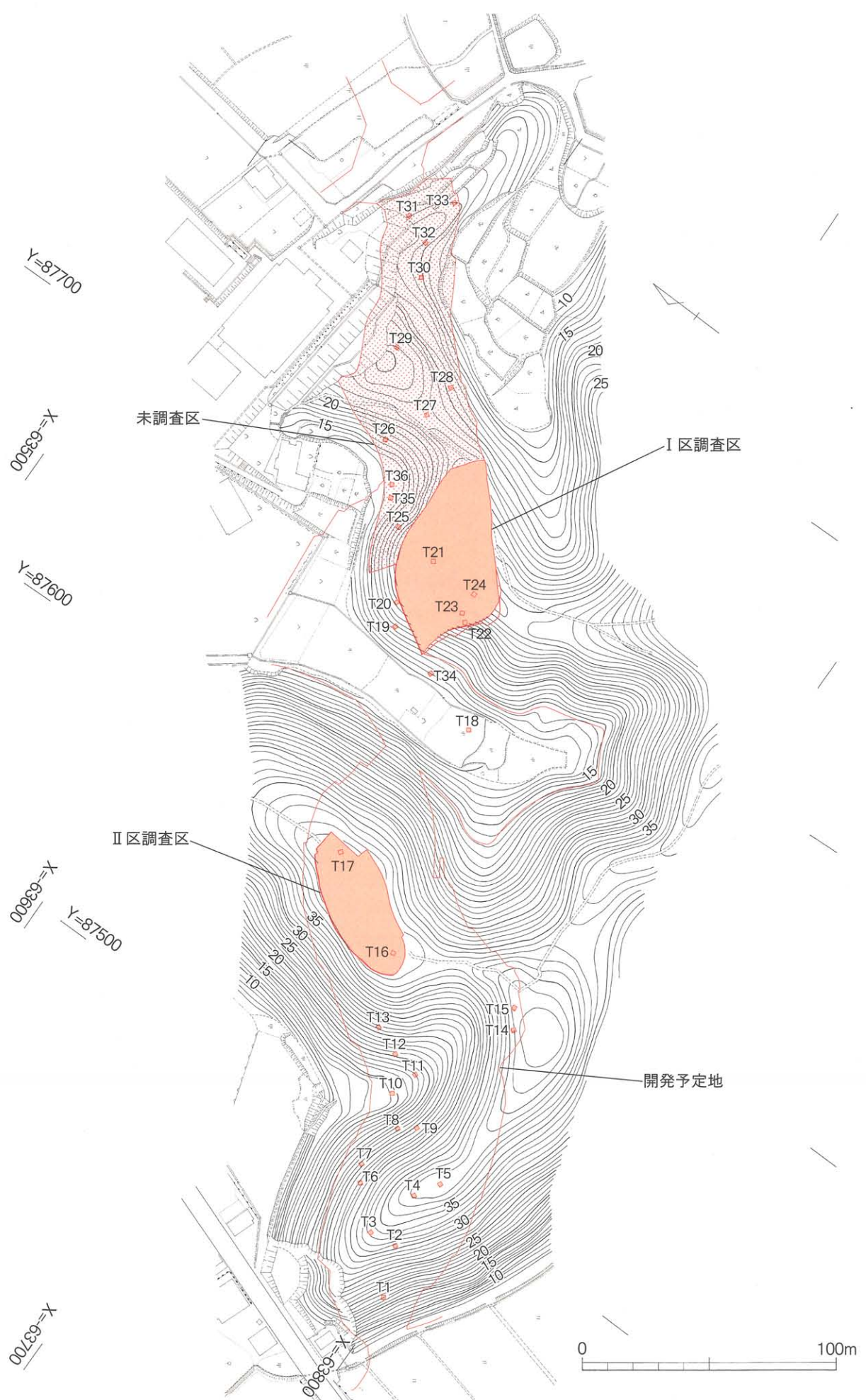
番号	遺 跡 名	種 別	番号	遺 跡 名	種 別
1	阿太加夜神社境内遺跡	散布地	67	東出雲中学校校庭遺跡	散布地
5	本谷経塚	経塚	68	東出雲中学校東側遺跡	散布地
11	高井横穴群	横穴	69	五反田遺跡	散布地
12	揖屋神社古墳	古墳	83	堤谷古墳群	古墳
14	ヤジ山横穴群	横穴	87	後谷窯跡	窯跡
15	四ツ廻横穴	横穴	95	天王横穴	横穴
20	鳥越古墳	古墳	96	馬場坂遺跡	散布地
21	高庭経塚	経塚	98	神子谷古墳	古墳
23	夫敷遺跡	水田跡	99	姫津遺跡	散布地
25	意字平野条里制遺跡	条里跡	100	鳥越寺院跡	寺院跡
26	栗坪古墳群	古墳	101	以下谷古墳	古墳
27	春日遺跡	散布地	102	古城山城跡	城跡
29	屋台垣横穴群	横穴	103	後谷横穴群	横穴
30	古城山横穴群	横穴	104	山田尾遺跡	散布地
31	古城山古墳群	古墳	105	岸尾遺跡	散布地
33	姫津古墳群	古墳	106	鷓貫遺跡	散布地
34	姫津谷横穴群	横穴	107	島田古墳	古墳
35	三反田 A 古墳群	古墳	108	長廻横穴群	横穴
36	以下古墳	古墳	109	長廻古墳	古墳
37	大木権現山古墳群	古墳	110	大畑遺跡	散布地
39	寺床遺跡	古墳・住居跡	111	渋山池 B 遺跡	散布地
40	竹ノ花上遺跡	散布地	112	渋山池 C 遺跡	散布地
41	内馬池横穴群	横穴	113	赤坂池横穴群	横穴
42	春日城跡	城跡	114	大鳥才ノ神遺跡	祭祀
45	城山城跡	城跡	118	東西畑遺跡	散布地
50	以下谷池北岸遺跡	散布地	132	恵比寿遺跡	散布地
51	古城山遺跡	散布地	133	受馬遺跡	集落跡
52	後谷池古墳	古墳	134	堂床遺跡	集落跡
53	赤廻遺跡	散布地	135	堂床古墳	古墳
54	須田神社境内遺跡	住居跡	136	勝負遺跡	集落跡
55	才ノ峠古墳	古墳	137	林廻り古墳	横穴墓
56	栗坪遺跡	住居跡	138	四ツ廻Ⅰ遺跡	集落跡
57	戸田屋敷横穴群	横穴	139	四ツ廻Ⅱ遺跡	集落跡
58	荷延古墳群	古墳	140	原ノ前遺跡	集落跡
59	島田池古墳	古墳、集落跡、横穴墓群	142	伝揖東氏館跡	館跡
60	島田横穴群	横穴			
61	後谷池東横穴群	横穴			
62	渋山池古墳群	古墳			
63	安垣古墳群	古墳			
64	渋山池遺跡	散布地			
65	渋山池南古墳群	古墳			
66	時子谷古墳	古墳			

## 第2章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

平成12年度、島根県東出雲町教育委員会は、島根県松江土木建築事務所から依頼を受けて、主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路（改良）工事に先立ち、道路予定地内の埋蔵文化財調査を行うこととなった。計画されたルートは、周知の遺跡や未周知ながら遺跡の存在が疑われる場所などがあり、遺跡が密集する予断を許さない場所であった。特にルート上にある古城山は、出雲郷小学校南側の低丘陵地で昔から数多くの遺跡があると言われた場所であった。当教育委員会と島根県松江土木建築事務所ではルート変更を含む遺跡の取り扱いについて協議を行った。しかし島根県松江土木建築事務所は、ルート変更は距離的に長くなる上、予算的に厳しいことから、ルート変更は困難であるということで、然るべき埋蔵文化財調査を行ってから道路工事着工に関する協議を行う方向で調整した。それを受けて当教育委員会では、ルート内、特に古城山を中心とした低丘陵部の分布調査を重点的に行い、遺跡のさらなる存在の確認に努めた。さらに平成14年度も、より詳細な分布調査を行って、遺構や遺物の発見に努めた。それらの結果を受けて平成15年1月18日から、ルート内の遺跡の規模や範囲を確定させるための試掘調査を開始した。試掘調査は冬場で積雪もする悪条件の中行った。翌15年度も引き続き試掘調査を行い、9月30日に調査を終えた。結局、試掘調査は遺跡内のほぼ全面で広範囲に行われ、計36ヶ所トレンチを入れた。

試掘調査の成果を受け、当教育委員会は発掘（本）調査の範囲を決定した。それによると当初、道路予定地の東側の丘陵地全面を発掘調査する予定であった。しかし発掘調査前の樹木の伐採中に、西側の丘陵地に遺跡と思われる箇所が見つかり、急遽、その丘陵地の尾根部分も発掘調査することとなった。

そのような経緯を経て、発掘調査は平成15年11月1日から、西側の古城山遺跡Ⅱ区から行うこととなった。Ⅱ区が発掘調査は平成16年5月31日まで行った。一方、東側の古城山Ⅰ区が発掘調査は、平成16年4月1日から作業に入った。Ⅰ区のA・B両調査区は、最終的に平成17年6月30日まで発掘調査作業を行った。



第2図 古城山遺跡調査区配置図 (S=1:2000)



## 第3章 遺跡の概要

古城山遺跡は、谷を挟んで東側の丘陵のⅠ区調査区、西側の丘陵のⅡ区調査区から成る遺跡であり、平成17年度までは、Ⅰ区の一部とⅡ区の全部の発掘調査した。

古城山遺跡Ⅰ区調査区は標高24.0～31.0mの範囲に遺構が分布している。今回、Ⅰ区調査区の中でA・Bの調査区を発掘調査した。その面積は2036.52㎡である。今回の調査では、Ⅰ区調査区において横穴墓1穴、竪穴住居跡1棟(SI01)、加工段6段、古道などを検出した。Ⅰ区調査区の最も標高の高い尾根部分は、削平を受けて、平らな部分が広く、南北約35m、東西約12m程度の平坦地になっている。頂上から見られる景色は、東出雲町の中心街から中海、弓ヶ浜半島まで見渡せる良い場所である。遺構はその周辺の加工段など斜面部分に多く見られた。

Ⅱ区調査区は、標高40.0m程度の丘陵地である。尾根頂上は南北約35m、東西約15m程度の平坦な部分が広がる。Ⅱ区調査区全体の面積は1120.89㎡である。頂上から西側を見ると意宇平野が眼下に広がる、景色の良い丘陵である。Ⅱ区調査区においては、竪穴住居跡1棟(SI01)、溝1基(SD01)、加工段2段、土壌8基(SK01～SK08)、性格不明遺構1基(SX01)、ピット4個を検出した。Ⅱ区調査区は、前章で記述したとおり、樹木伐採中に遺跡があるとわかった調査区であり、調査区の周囲は、伐採作業の道付け工事の際に機械で削平されている。

Ⅰ・Ⅱ調査区の周辺では、1969年に発掘調査された古城山古墳が存在する。

### 第1節 Ⅰ区調査区

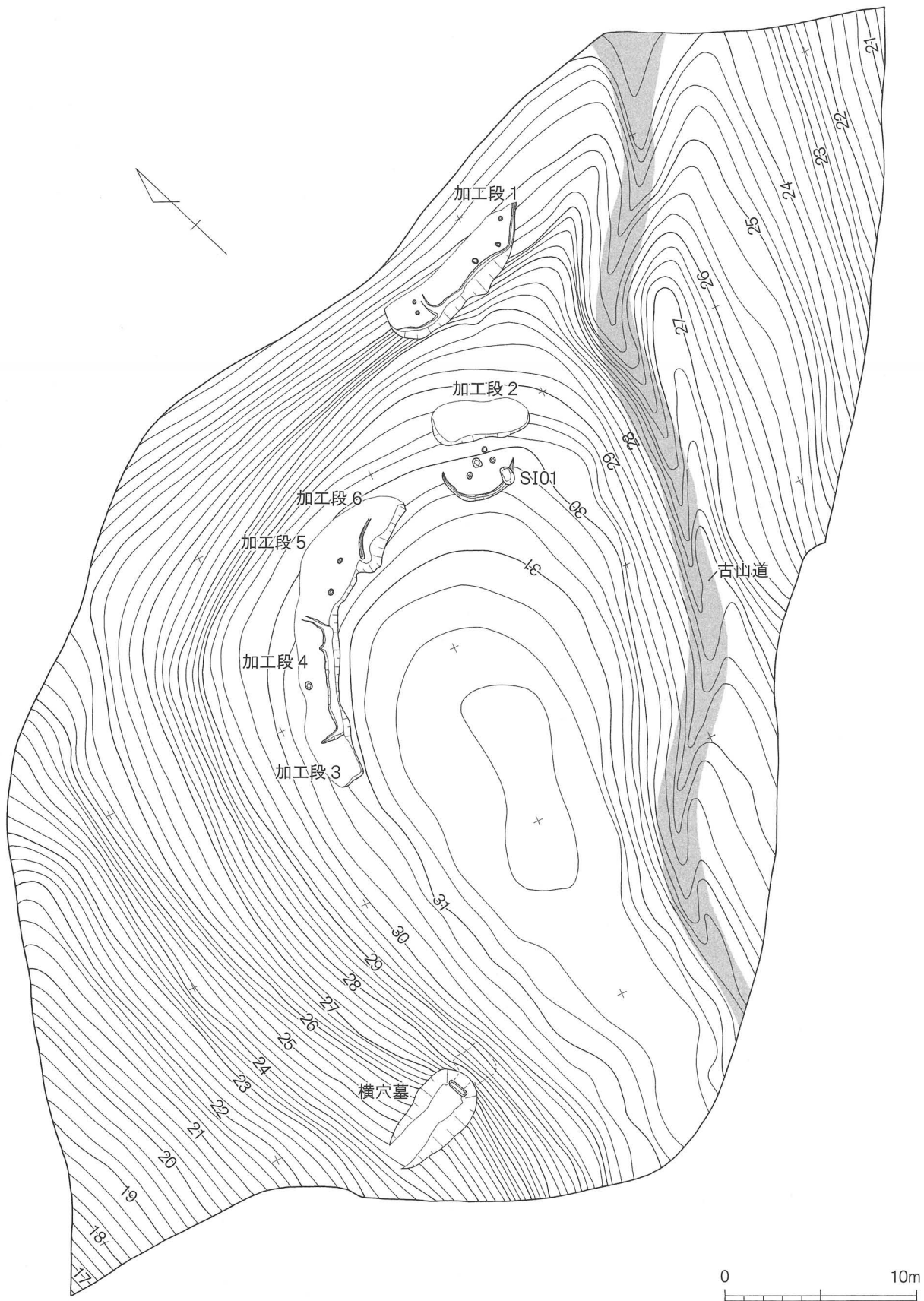
#### SI01 竪穴住居跡(第4図)

Ⅰ区調査区では、竪穴住居跡を1棟検出した。場所は調査区のほぼ中央部の北側、尾根部分から北東へ徐々に勾配が下る地点で、標高は床面で30.00mを測る。住居跡は、北東側が大きく破損しているが、隅丸方形で、残存部の上縁部径は3.82mを測る。南西側の壁は残りがよく、その最大壁高は54.5cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の床面からは4個のピットが検出された。うち柱穴はP1～P3であり、P4は中央ピットと思われる。P1上縁部径は最大29cm、最小27cm、深さ21cmを測る。P2は、最大27cm、最小24cm、深さ58cmを測る。P3は、径26cmのほぼ円形で深さ53.5cmを測る。ピット間の間隔は、P1からP2が140cm、P1からP3が65cmで長方形の様相を呈する。中央ピットと考えられるP4は、径最大43cm、最小41cm、深さ17cmを測る。残存する周壁下からは、幅9cm～20cm、深さ2cm～7.5cmを測る壁体溝が検出された。

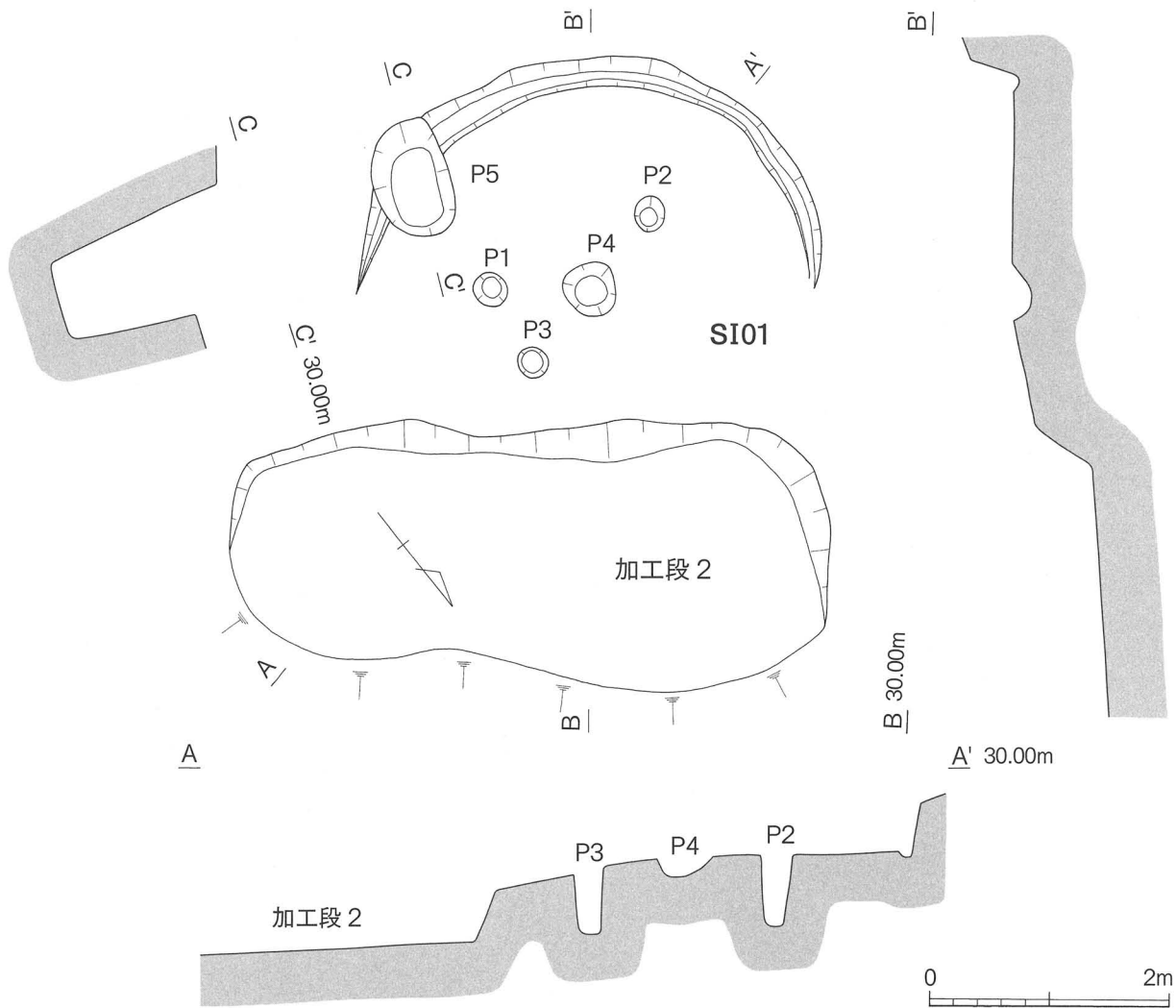
SI01には、東方向の周壁付近に大きなピットが検出された。P5は、周壁にかかるように検出され、上縁の長径0.98cm、短径0.65cm、深さ155.5cmを測る。SI01とは、同じ関連の遺構か違う時期の別の遺構かはわからない。

#### 出土遺物(第5図)

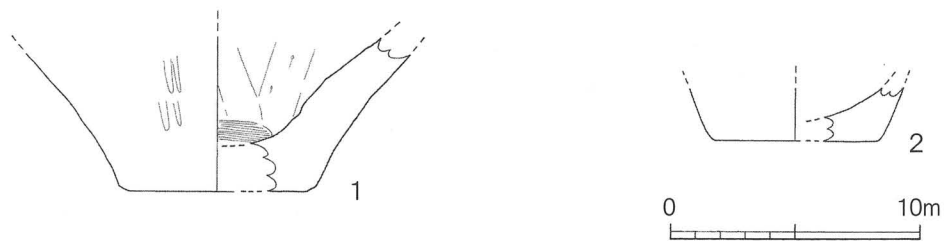
SI01からは弥生土器の甕片が2個出土している。どちらも平底の甕片で、底の部分である。



第3图 I区遺構配置図 (S=1/300)



第4図 I区 SI01・加工段2実測図 (S=1/60)



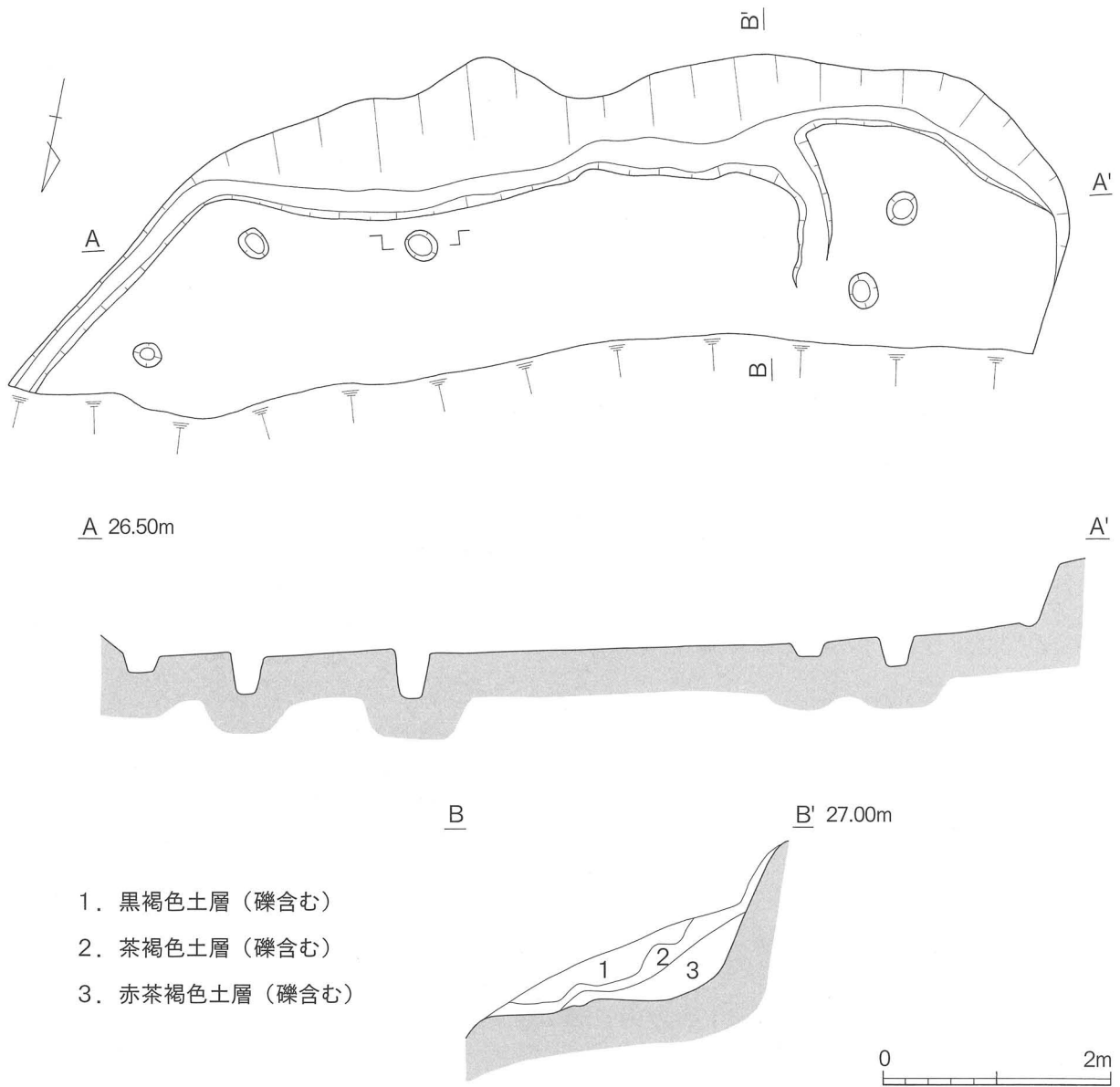
第5図 I区 SI01 出土遺物実測図 (S=1/3)

### 加工段1 (第6図)

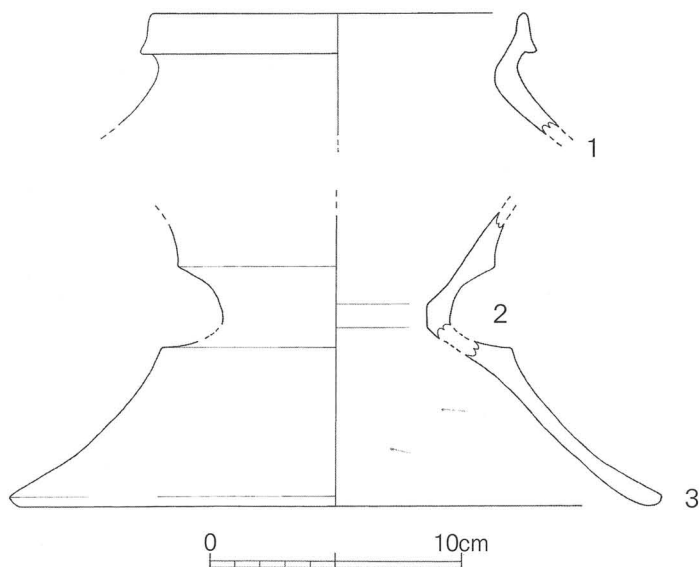
加工段1は、SI01の北東方向、標高25mから27.25mの位置で検出された。加工段の南西側にほぼL字形にカットされた壁面が立っている。長さは最長で9.15m、壁の高さは最高で1.14mである。床面から5個のピットが検出された。壁面下には深さはわずかながら、壁体溝が確認できた。2段の加工段が切り合う形で重なっているようにも見えるが、詳しいことは不明である。

### 出土遺物 (第7図)

加工段1から遺物が2個出土した。1は弥生土器の、甕口縁部で、口径は14.8cmを測る。2は



第6図 I区加工段1 実測図 (S=1/60)



第7図 I区加工段1 出土遺物実測図 (S=1/3)

鼓形器台の破片で、筒部の縮約が進んだものであり、内面にケズリ痕がわずかに確認できるため裾部として実測した。底径は25.0cmを測る。鼓形器台は脚部内面にヘラ削りが施されている。どちらの遺物も地山の直上付近の出土であり、加工段1との関連がある遺物と考えられる。

## 加工段 2 (第 4 図)

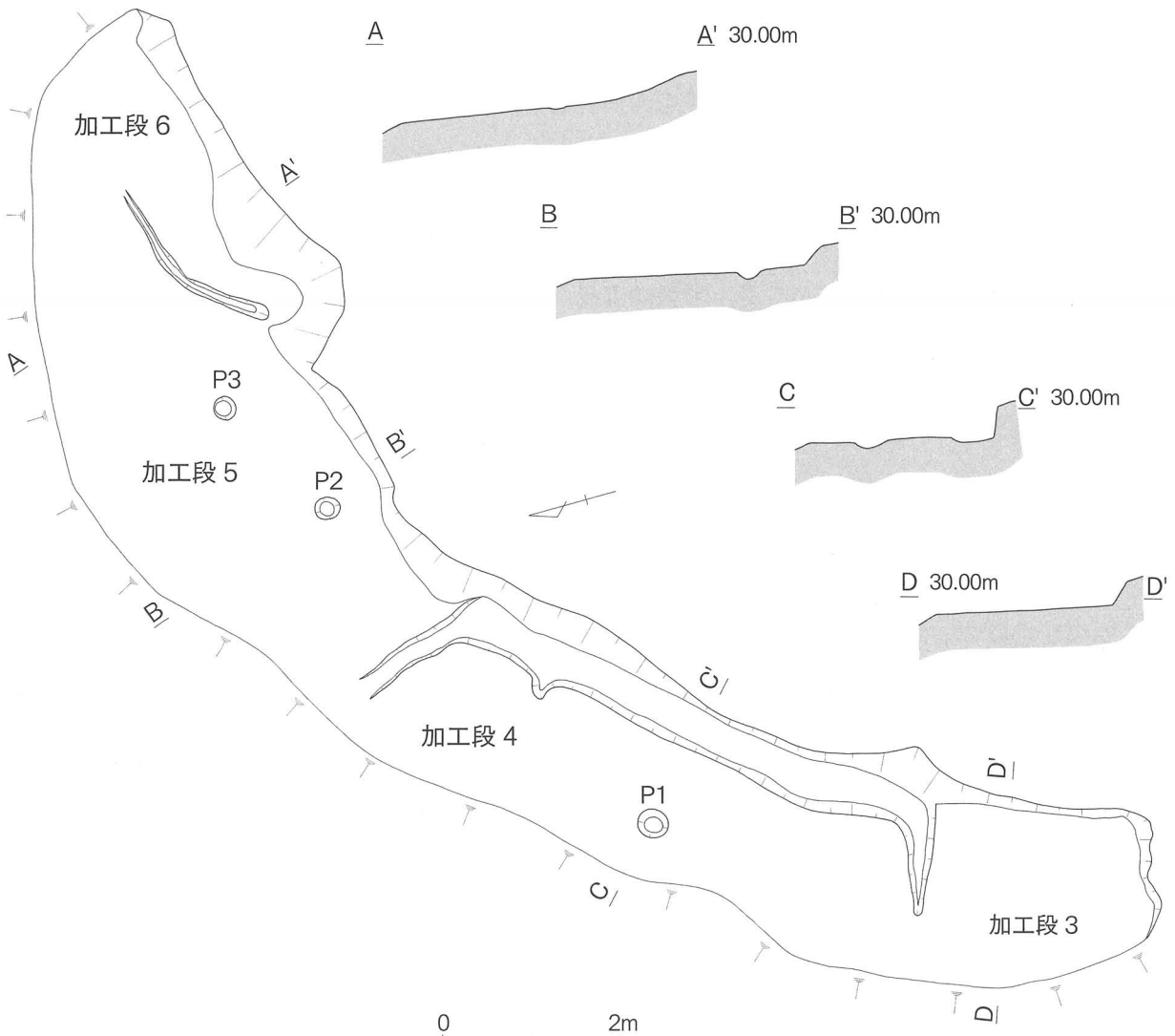
加工段 2 は、SI01 の北東方向に隣接する遺構で、SI01 の床面から 1 段低い場所に加工段 2 の床面を作る。SI01 の床面を破壊するように加工段 2 が作られたような形である。標高は、29.00m から 29.75m の間に位置する。

## 加工段 3・4・5・6 (第 8 図)

I 区では、大規模な加工段群も検出された。尾根部分の最北端部に、尾根を囲むような状況で検出した。単独の加工段ではなく、それぞれ別の 4 つの加工段が切り合う形で作られた結果、このような遺構になったと思われ、加工段 3・4・5・6 と、それぞれの遺構名を付けた。

加工段 3 は、加工段群の最も西側に位置する。ほぼ直線状の加工段で、規模は、最長部で 2.4m、周壁の高さは最高部で共に 25.3 cm を測る。西側を断面 L 字状にカットして平坦面を設けている。ピットなどは検出できなかった。

加工段 4 は、加工段 3 の北側に続くように検出された。尾根から北西部に向かって床面を設けている。ほぼ直線状の加工段で、規模は、長さ 5.90m で、周壁の高さは、最も高いところで 55.6 cm を測る。周壁の直下には、わずかではあるが窪みが見られ、周溝らしく思われる遺構もあり、



第 8 図 I 区加工段 3・4・5・6 実測図 (S=1/80)

加工段3との境目と認めた。加工段4の部分からは、ピット(P1)が1個検出された。

加工段5は、加工段4に隣接し、その西側に位置する。周溝が、加工段4との境を作っているが、加工段5自体に周溝は認められない。規模は、周壁沿いの長さで、2.8m、周壁の高さは最高部で24.9cmを測る。加工段5では、ピット(P2・3)が2個検出された。

加工段6は、加工段5の東隣に位置する、直線状の加工段である。規模は、長さ3.6m、周壁の高さは、最高部で36.7mである。加工段5とは、幅20cm程の溝で境を分ける。床面にピットなどはなかった。



第9図 I区加工段6出土遺物実測図(S=1/3)

### 出土遺物

加工段6から弥生土器が2個出土した。いずれも甕の底部で風化が著しい。1は底径8.6cmを測る底の厚い甕である。2は底径6.0cmを測る。調整は風化が激しく不明である。

### 横穴墓(第10図)

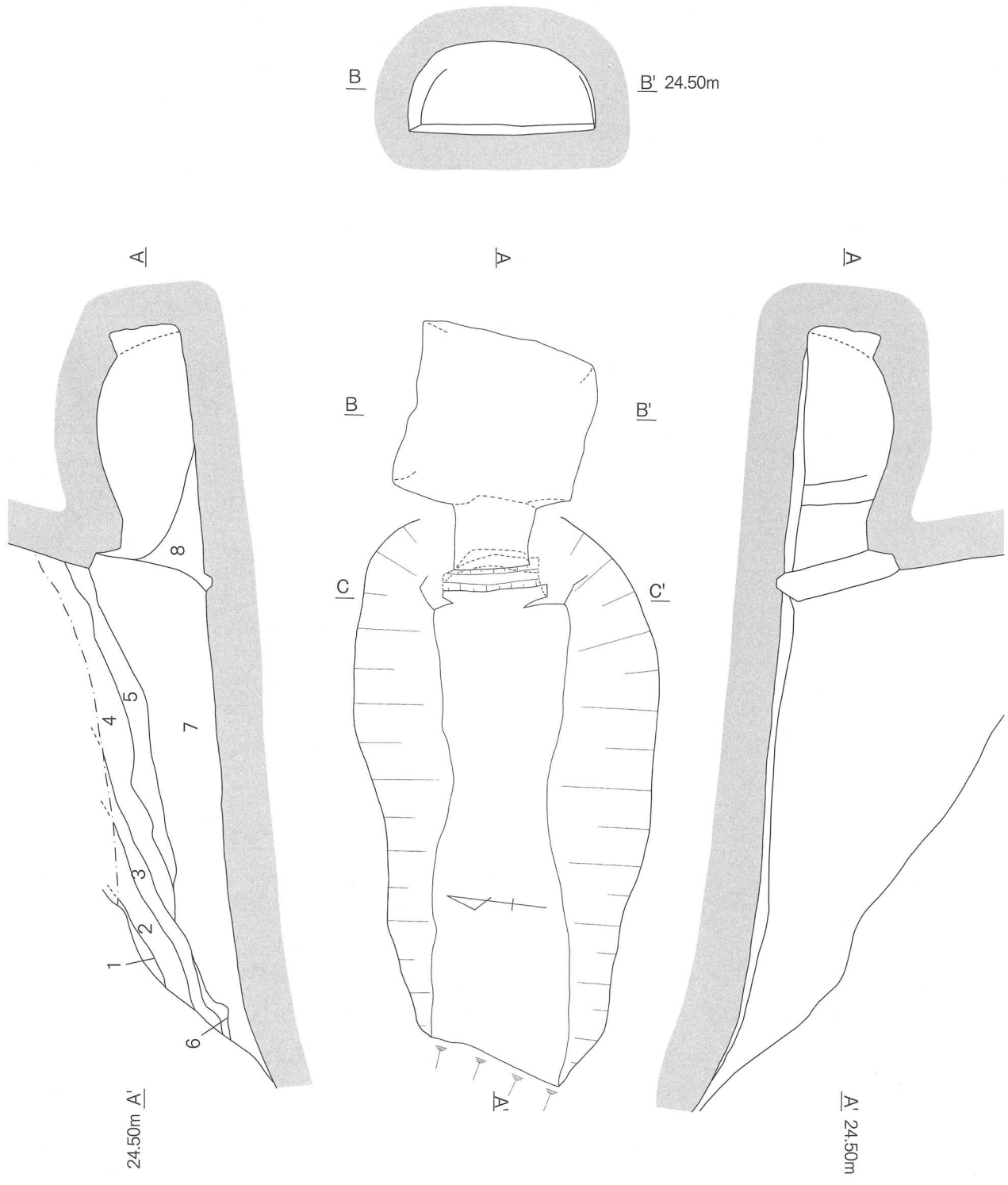
I区調査区の最南端部からは、横穴墓1穴が検出された。位置は、I区の北東方向に伸びる尾根の西側であり、南側の奥に向かってV字状の谷となっている地形の、比較的傾斜のきつい斜面上にある。標高24.25m付近で床面を成し、西向きに開口する。

**前庭部** 前庭部は、奥幅134cm、中間幅94cm、前端幅137cm、全長445cmを測る。平面的には、中央部でやや狭まるところがあるが、形状は広長タイプである。床面は、ほぼ平坦であるが、前端部に向かって緩やかに傾斜をしている。前庭部において遺物を検出することはなかった。

**羨門部** 形状は、台形を呈し、規模は下部幅113cm、上部幅81cm、高さ108cmを測る。開口部には、周囲9~16cmの削り込みがあり、床面には、幅22cm、深さ16cmの溝が掘られている。これらの施設は、羨門を閉塞する際、板状のものをはめ込んだ跡であると思われる。閉塞石は横穴墓検出時から見られなかった。閉塞装置とよべるものはなく、前庭部の堆積土が羨門を塞いだ状態で見つかり、羨道、玄室内にその堆積土が流入していた。横穴墓周辺からも閉塞石らしき石材は検出されることがなかった。

**羨道部** 羨道部は、手前幅75cm、奥幅82cm、奥行き60cmで、高さは羨道中央部で70cmを測る。わずかに手前から奥壁側に開く形である。

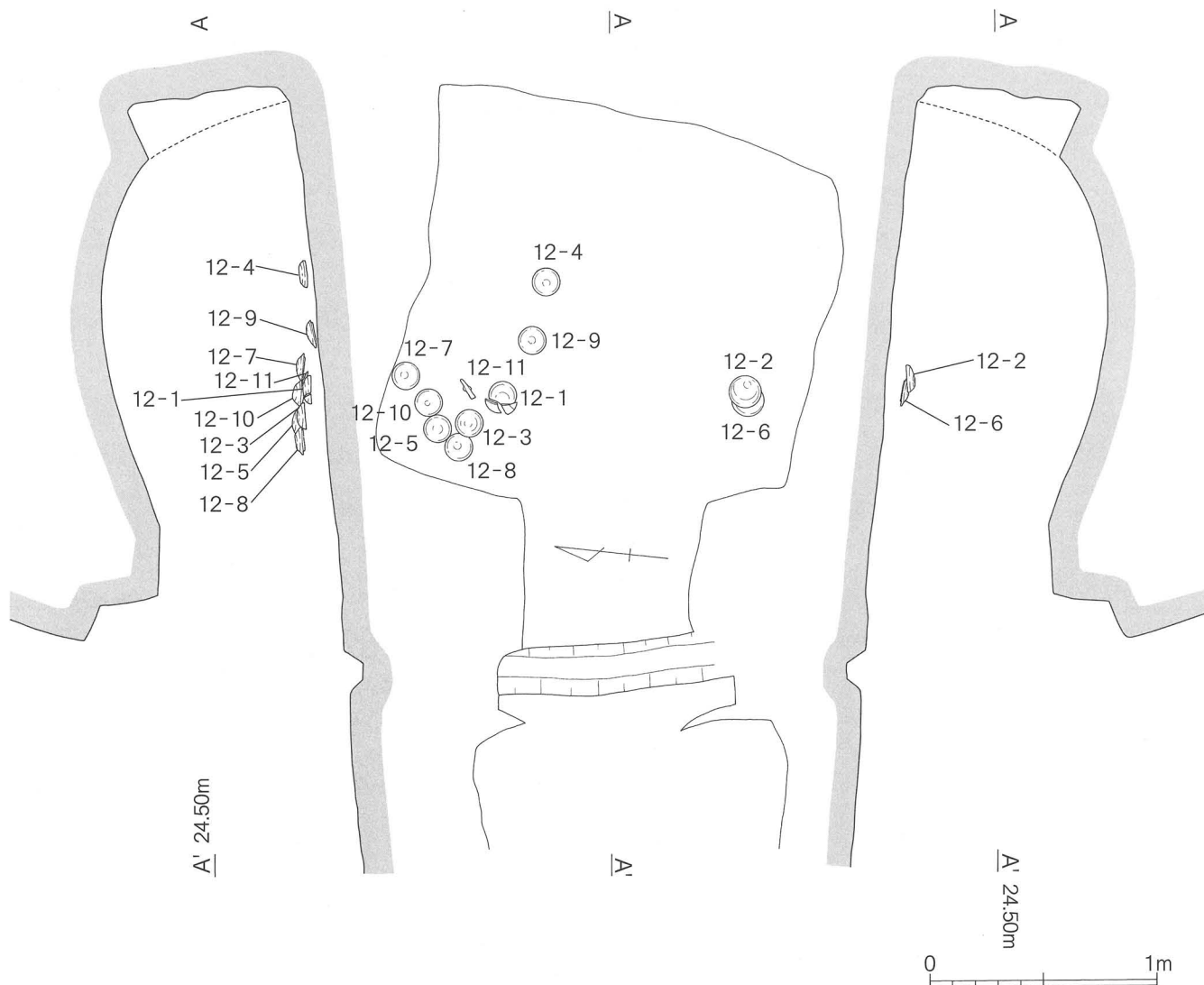
**玄室** 玄室は、幅が袖側179cm、奥壁側が177cm、奥行きが約170cmである。左壁が若干中央部のところで狭まっているが、ほぼ正方形プランを呈する。奥壁は、幅約1m、高さ約60cmにわたって崩落していた。したがって崩落した岩盤が、玄室内の奥壁側で留まった状態で検出された。右壁の長さは137cm、左壁は165cmを測る。高さが96cmで、屋根の形はドーム形である。四隅の床面から界線が立ち上がっているが、軒線、棟線は不明瞭である。床面は、前庭部に向かってやや緩やかに下っている。



1. 明褐色土層(礫を含み、やわらかい)
2. 暗黄褐色土層(固くしまる)
3. 暗茶褐色土層(礫を多少含み、固くしまる)
4. 明茶褐色土層(礫を多少含み、固くしまる)
5. 暗赤褐色土層(礫を所々含む)
6. 明赤褐色土層(礫を多く含む)
7. 明赤褐色土層(礫を多少含む、固くしまる)
8. 明赤褐色土層(7層と比べ、粗い土層で細かい礫を含む)

第10図 I区横穴墓実測図 (S=1/60)





第 11 図 I 区横穴墓玄室内遺物出土状況実測図 (S=1/30)

**堆積状況** 試掘調査時に、この横穴墓の存在はわかった。横穴墓の上半分の堆積土は、その試掘調査時に流失したものである。第 1、2、3 層は流失により詳細はわからない。第 4 層、第 5 層はところどころに礫が混ざる。第 7 層については、この横穴墓の堆積土の大部分を占める土層であり、閉塞石がないこの横穴墓の羨門を覆うように堆積している。第 8 層は、玄室内に流れ込んだ土層であるが、第 7 層と似かよった土層であり同じ堆積土と考えられる。

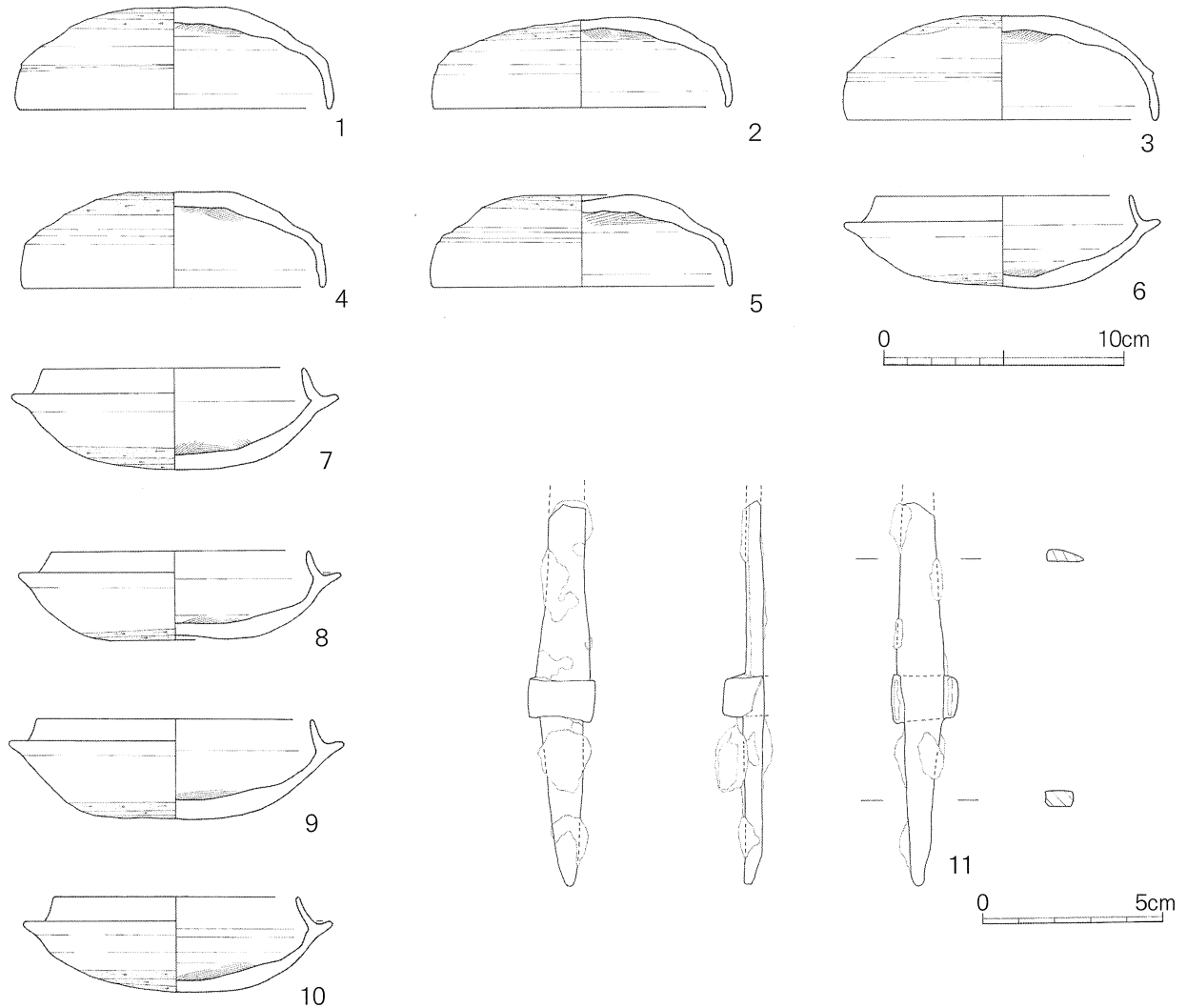
**遺物出土状況 (第 11 図)** 前庭部からは、遺物の出土はなかったが、玄室からは床面上で蓋坏 5 セット、鉄器 1 点を出土した。左壁袖側に多くの遺物が集中し、蓋坏 4 セットと鉄器が出土している。残りの蓋坏 1 セットは、右壁袖側で出土している。前述のとおり、閉塞石など、閉塞装置に使用されたものは調査区内には残っていなかった。玄室内には、玉類などもなく、人骨も残っていなかった。

**出土遺物 (第 12 図)**

玄室内から出土した須恵器は、蓋坏が全部で 10 個出土した。ほとんどが完形で出土し、すべて蓋と坏のセットとなる。須恵器 1 は蓋で、口径 12.9 cm、器高 4.2 cm を測る。天井部外面に回転



ヘラ削りを施し、それ以外は回転ナデで、内面天井部は回転ナデ後にナデた痕跡をもつ。2は蓋で、口径 12.3 cm、器高 3.6 cmを測る。外面には一部付着物が残る。口縁端部内面にわずかに段をもつ。3は蓋で、口径 12.8 cm、器高 4.3 cmを測る。外面天井部は回転ヘラ削りが施され、端部外面に一条の沈線が巡り、口縁端部内面に段をもつ。4は蓋で、口径 12.5 cm、器高 4.0 cmを測る。天井部外面に回転ヘラ削りが施される。強いナデにより稜が形成され、口縁端部内面には調整が



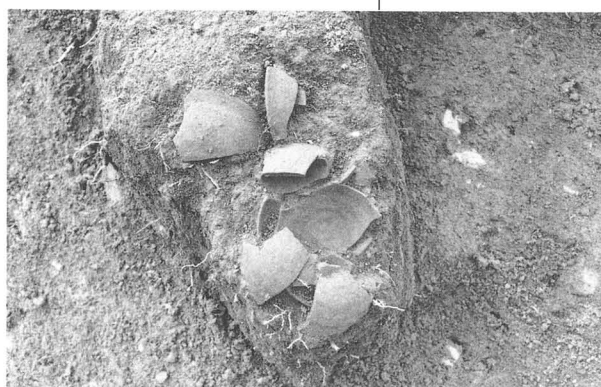
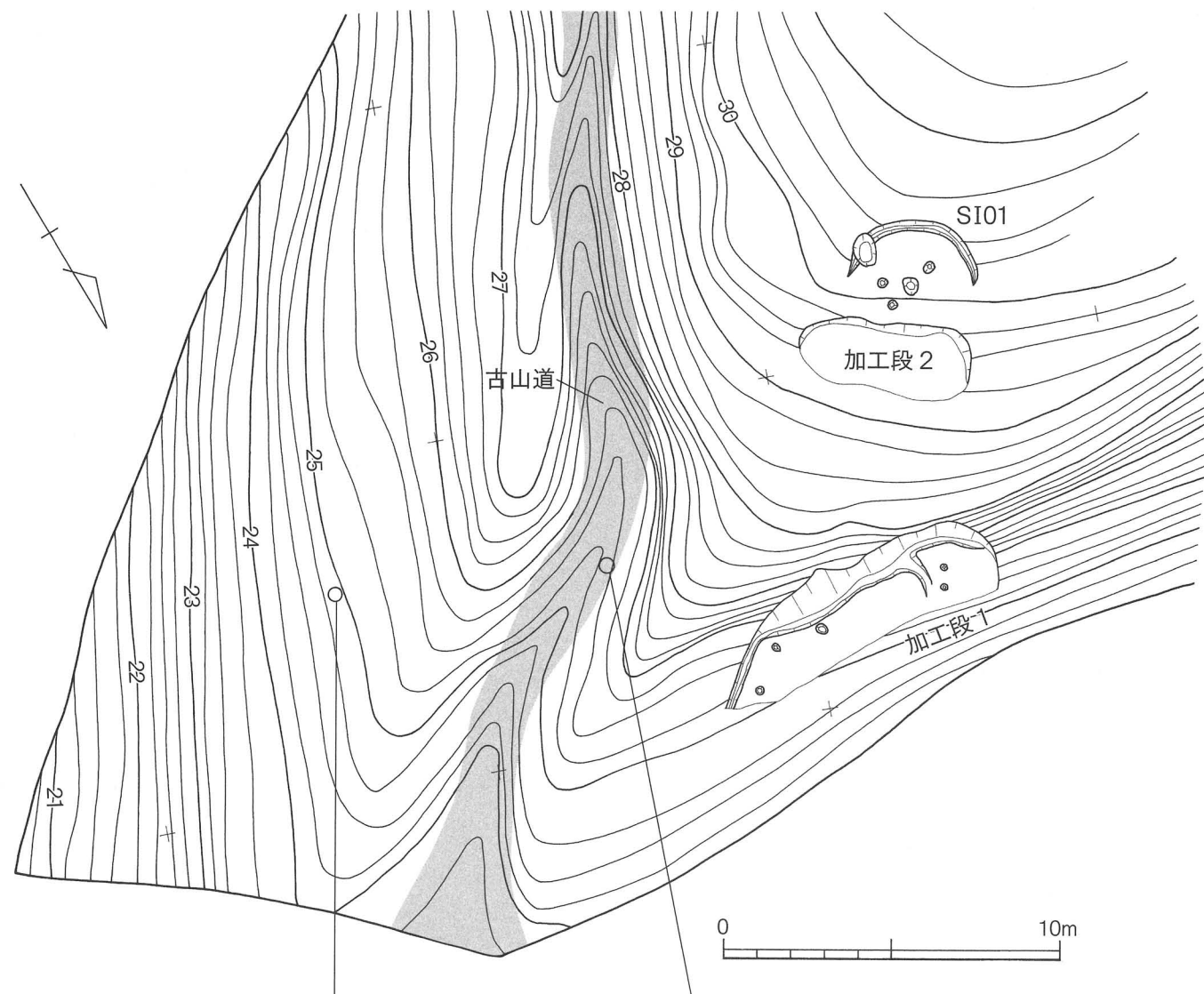
第 12 図 I 区横穴墓玄室内出土遺物実測図（須恵器 S=1/3・刀子 S=1/2）

施される。外面には付着物が残る。5は蓋で、口径 12.3 cm、器高 3.8 cmを測る。天井部に回転ヘラ削りが施され端部からやや上方に一条の沈線が巡り、天井部外面から端部にかけて強い段をもつ。端部内面には調整が施される。外面に付着物が残る。6は坏で、口径 10.6 cm、器高 3.7 cmを測る。口縁がやや長く内傾して立ち上がり、底部外面は回転ヘラ削りが施される。内外面共に付着物が残る。7は坏で、口径 10.9 cm、器高 4.2 cmを測る。8は坏で、口径 10.2 cm、器高 3.7 cmを測る。9は坏で、口径 11.5 cm、器高 4.2 cmを測る。10は坏で、口径 10.2 cm、器高 3.9 cmを測る。外面には付着物が残る。どの土器も時期は出雲 3～4 期の特徴を示している。玄室内では、鉄製品も出土した。11は刀子と考えられる遺物で、玄室の左壁部分ほぼ中央で、須恵器に囲まれる

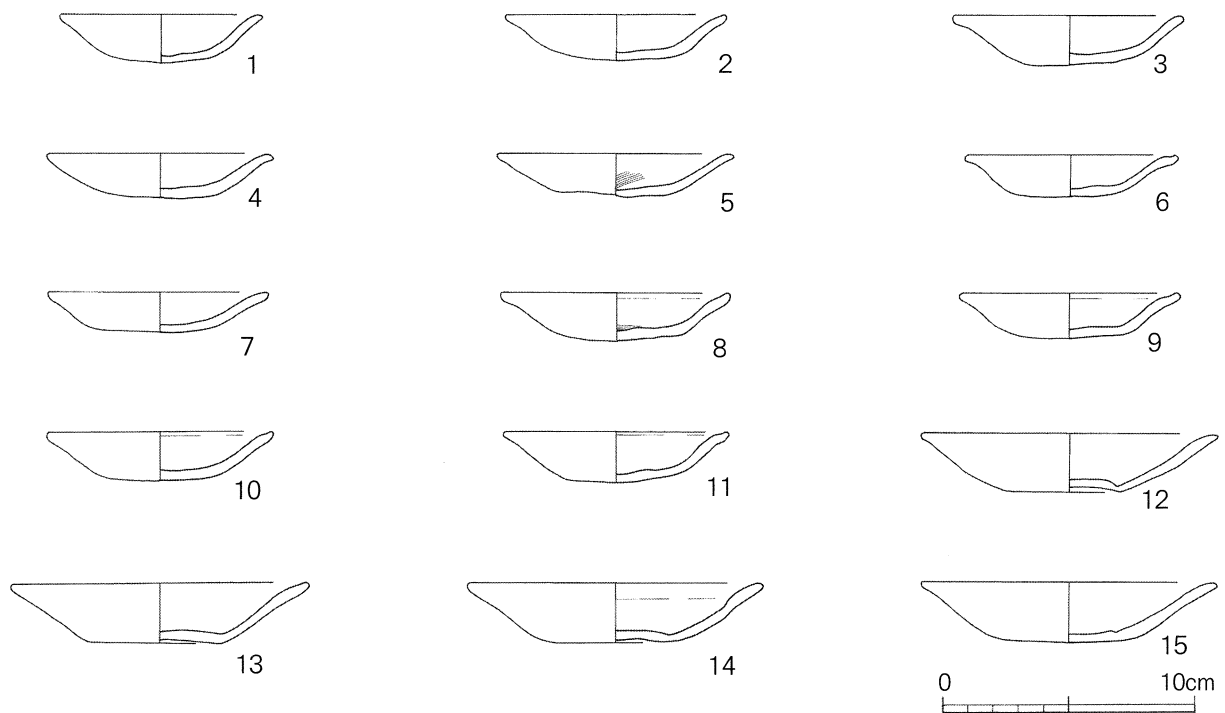
ような位置で検出された。全長 10.5 cmほど残存する。うち刀身は 4.6 cmで刃はかなり幅狭になっている。

### 古山道と山道内出土土器（第 13、14 図）

丘陵尾根の東側には、V字状に掘り込んだ古い山道が検出された。この山道は調査区最南端部の尾根の付け根部分から端を発し、だんだん深さを深くしながら広がっている。調査区の北側からS字状に曲がりながら北東方向に向かって下っているこの山道は、現出部分で長さ約 50m に及ぶ。



第 13 図 遺構外遺物出土状況 (S=1/200)



第14図 古山道出土土師質土器実測図 (S=1/3)

この古山道内の北側から土器群が一括して出土した。出土した土器は、小ぶりの京都系土師質土器の皿16個である。

第14図1は、口径8.1cm、器高1.9cmで内面底部中央がやや窪み、口縁端部は先細りしている。2は、底部中央がやや膨らみ内外面ともヨコナデが施されている。口径8.8cm、器高1.8cmである。3は口径9.2cm、器高1.9cmを測り、体部は内湾気味に立ち上る。4も3同様に体部が内湾して立ち上る。口径9.0cm、器高1.7cmを測る。5は、口径9.4cm、器高1.6cmを測る。内面底部はやや窪み、体部はやや内側に湾曲して立ち上る。6は口径8.4cm、器高1.6cmを測る。内面底部はやや窪み、口縁端部にはわずかに段を持っている。7は、口径8.8cm、器高1.5cmを測る。内面底部に窪み、口縁端部に段を持つ。8も、7と同様の特徴を持つ。口径9.1cm、器高1.9cmを測る。9は、口径8.8cm、器高1.8cmを測る。10は、口径9.0cm、器高1.9cmを測る。11は、内面底部中央が窪み、口縁端部に段を持つ。口径9.0cm、器高2.0cmを測る。12は、内面底部が上げ底気味に内に窪み、その周りは強い段を持つ。体部は、やや外傾しながら口縁端部に向かっている。口径11.8cm、器高2.3cmである。13は、口径11.8cm、器高2.4cmで、やはり内面底部には強い段がある。14は、口径11.7cm、器高2.4cm内面底部は強い段をもつ。15は口径11.7cm、器高2.4cm、を測り、内面底部は強い段を持つ。どの土器も底部外面に糸切り痕は見られず、糸切り後、指の押圧によって整形されたものであると考えられる。口縁端部は先細りして丸くおさめてあるものがほとんどである。内面の底部や口縁部に段をもつ土器が多い。口径は最大11.8cmから最小8.1cm、器高は最高2.4cmから最小1.5cmのものがあり、大きさは多少のばらつきはあるが、形態はほぼ同じ特徴をもつ。

これら古山道内から出土した京都系土師質土器や後述する須恵器の蓋坏は、遺物が単独で出土したもので、遺構に伴うものではなかった。第13図ではそういった遺物の出土した地点を示し、京都系土師質土器や遺構外出土遺物の須恵器などの出土状況は、写真を掲載することで著した。

## 遺構外出土遺物（第 15、16、17、18、19 図）

I 区調査区では前述のとおり、住居跡や加工段など遺構が多く検出され、それに伴う遺物も多く出土した。しかし遺構に伴わない遺物や荒掘の際、掘り起こした流土中から偶然採取した遺物なども多数あった。この項では、そういった遺物を、遺構外出土遺物としてまとめて、出土状況や遺物の特徴などを述べたい。

第 15 図 1～12 は弥生土器である。1 は調査区の西側、横穴墓と同一斜面の表土中から出土した壺と考えられる。口径は 26.0 cm を測る。口縁部が直立して立ち上がり、その外面には 3 条の擬凹線文が施され、内面には刷毛目が施されている。時期は後期初頭のものと思われる。2 は調査区山道の東側の傾斜地で、ほとんど調査区域外との境目のところで出土した。口縁が上下に拡張し内傾している甕と思われる。3 も 2 と同様の表土中から出土した弥生土器である。口径 16.0 cm を測る。口縁部には 3 条の擬凹線文が確認できるが、4～5 条の擬凹線文が施されているものと思われる。時期は後期初頭のものである。4 は東側の調査区域境界付近の表土中から採取した。口径は 17.9 cm を測る。甕の口縁部で短めの複合口縁が直立気味に立ち上がり、稜は下方に小さく突出する。口縁外面には 3 条の擬凹線文が施されている。5 も東側の境界付近で出土した。口径は 16.2 cm を測る。直立気味に立つ口縁には、2 条の擬凹線文が施されている。6 も東側の斜面付近の表土中から出土した。口径は 19.5 cm を測る。全体が風化していてどのような調整がなされたか不明である。7 は西側の斜面の表土中から出土した甕である。口縁部はやや外反気味に短く直立する。口縁部内面はなだらかで屈曲しない。外面には 4 条の擬凹線文が認められ、口縁部段部がわずかに下方に突出している。8 は西側斜面、横穴墓の北側付近の表土から出土した。口径は 19.0 cm を測る。口縁部は直立気味に緩くカーブを描いて立ち上がり、稜は横方向に小さく突き出ている。口縁部外面には 7 条の擬凹線文が施されている。時期は後期中葉と思われる。9 は尾根から見ると北側の斜面の表土中から出土した器台である。口径 19.0 cm を測る。口縁部外面は外反気味に立ち上がり、5 条の擬凹線文が施される。内面はなだらかで屈曲しない。外面は赤色顔料が施されたように見える。時期は後期中葉と思われる。10 は北側斜面の廃土中から採取した甕底部である。外面は縦方向のハケメが施され、内面はヘラケズリが施され、ススが付着し黒くなっている。11 は西側斜面の表土中から出土した甕底部である。底径 5.0 cm を測る。外面の一部にハケメが施されているのが確認されるほかは、全体的に風化して調整などは不明である。12 は北側斜面の廃土中から採取した甕底部である。底径は 3.6 cm を測る。全体的に焼成不良のため手法などは不明である。

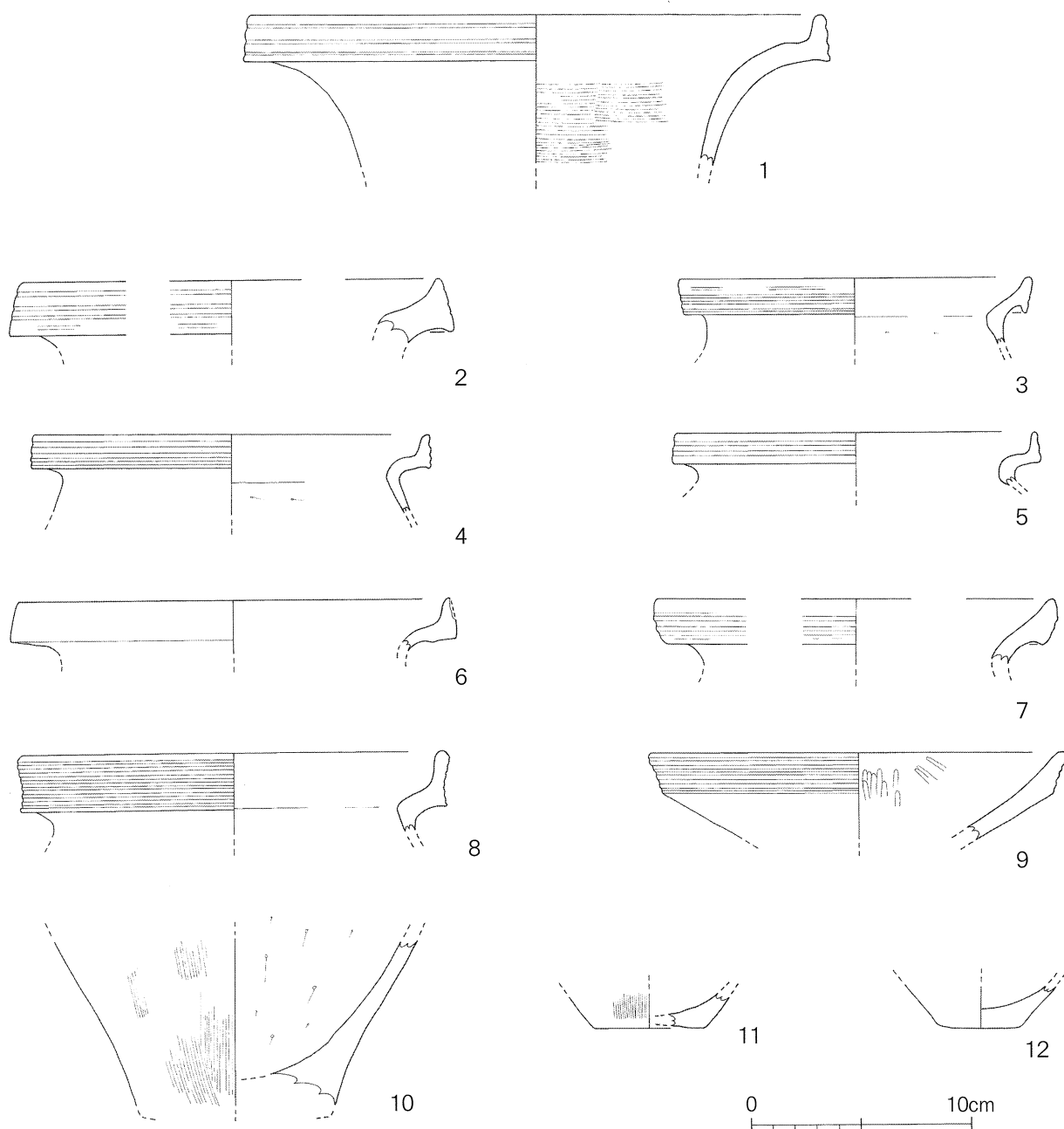
第 16 図 1～4 は須恵器である。1・2・3 は古山道の東側の斜面から出土した。1 は蓋で、口径 12.9 cm、器高 4.4 cm を測る。口縁部端部が内湾している。2 は坏で、口径 11.4 cm、器高 4.2 cm を測る。口縁部は短く内傾して立ち上がり、外面底部にヘラオコシ痕を残す。3 も坏で、口径 10.7 cm、器高 4.0 cm を測る。口縁部は短く立ち上がり、底部はヘラ状工具で切り離した後、工具でナデを施される。内面底部には朱が施された跡が残る。時期は出雲 4～5 期である。4 は坏で、西側斜面の表土層から出土した。口径 12.4 cm、器高 4.1 cm、底径 8.1 cm を測る。高台のない坏で外面底部は糸切りによる切り離しが行われている。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部外面は括れている。時期は高広 IV a 期である。

第 17 図 1 は西側斜面の廃土中から採取した中国陶磁器、龍泉窯系青磁で外面に鎬蓮弁文を施した碗である。口径は 17.4 cm を測る。内面は無文である。オリーブ灰色が鮮やかな碗である。

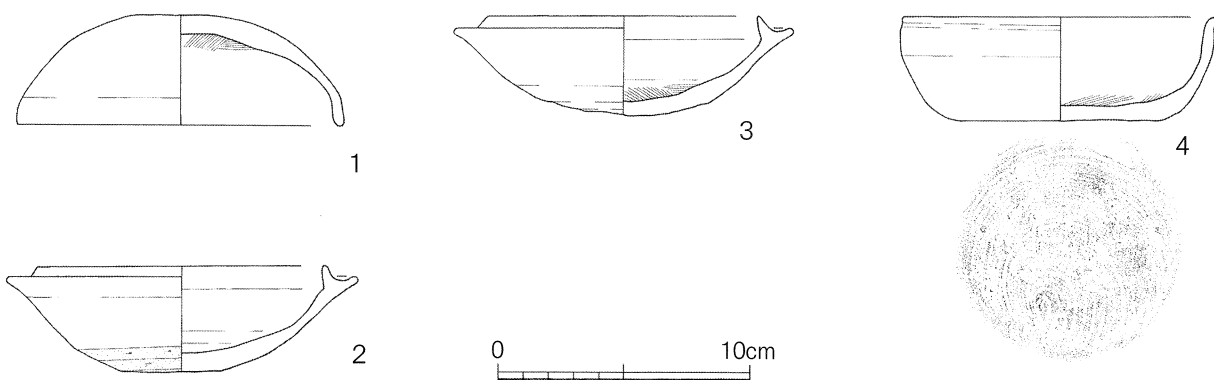
第 18 図 1・2 は石器である。1 は西側斜面の廃土中から採取した完形の打製石斧である。全長 19.4 cm、最大幅 11.1 cm、厚さ 2.1 cm を測る。中央部周辺の表裏には主要剥離面を大きく残し、刃部にかけては細かく二次加工が施されている。2 は西側斜面、横穴墓の前庭部下部付近の廃土中から採取した石器で、河原石を転用した敲石である。下方部端部には敲打による潰れが確認できる。

第 19 図 1 は北側斜面の廃土中から出土した宝篋印塔の破片である。幅 3 mm 強の沈線が 3 条入っている。

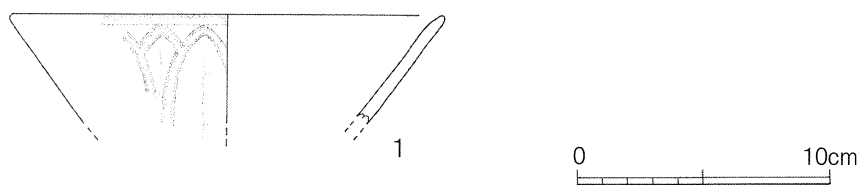
遺構外出土の遺物については、土中から出土したものもあるが、前述のとおり荒掘りの際に掘り起こした流土中から拾い上げるものも多くあった。よって正確な出土地点ではなく、採取した地点を著している。



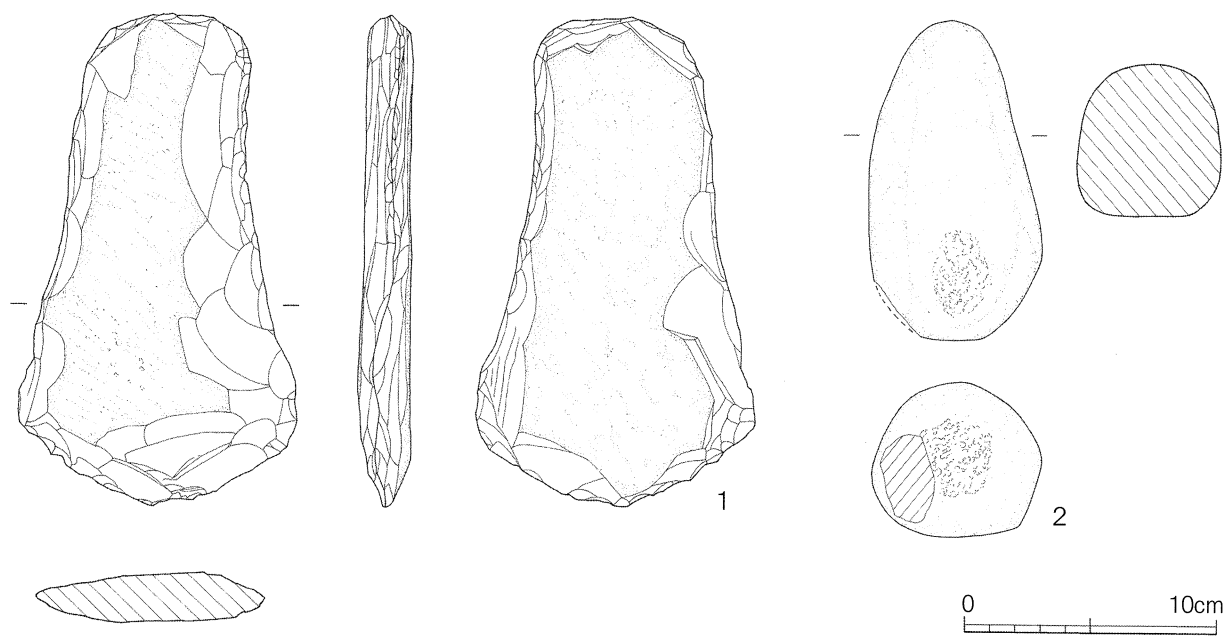
第 15 図 遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/3)



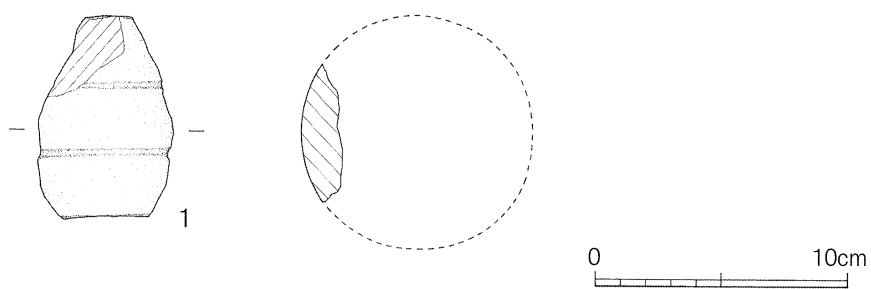
第 16 図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)



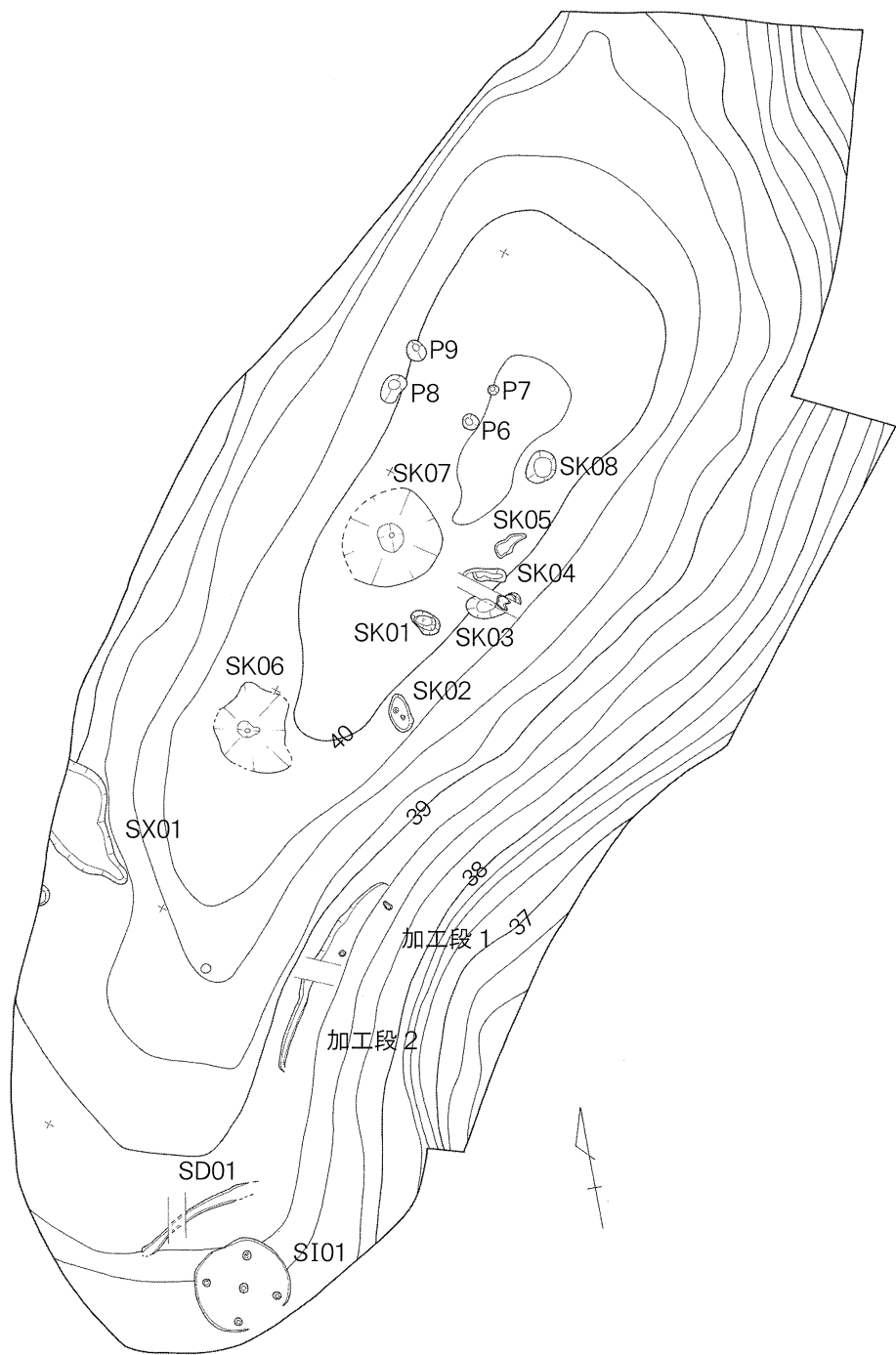
第 17 図 遺構外出土陶磁器実測図 (S=1/3)



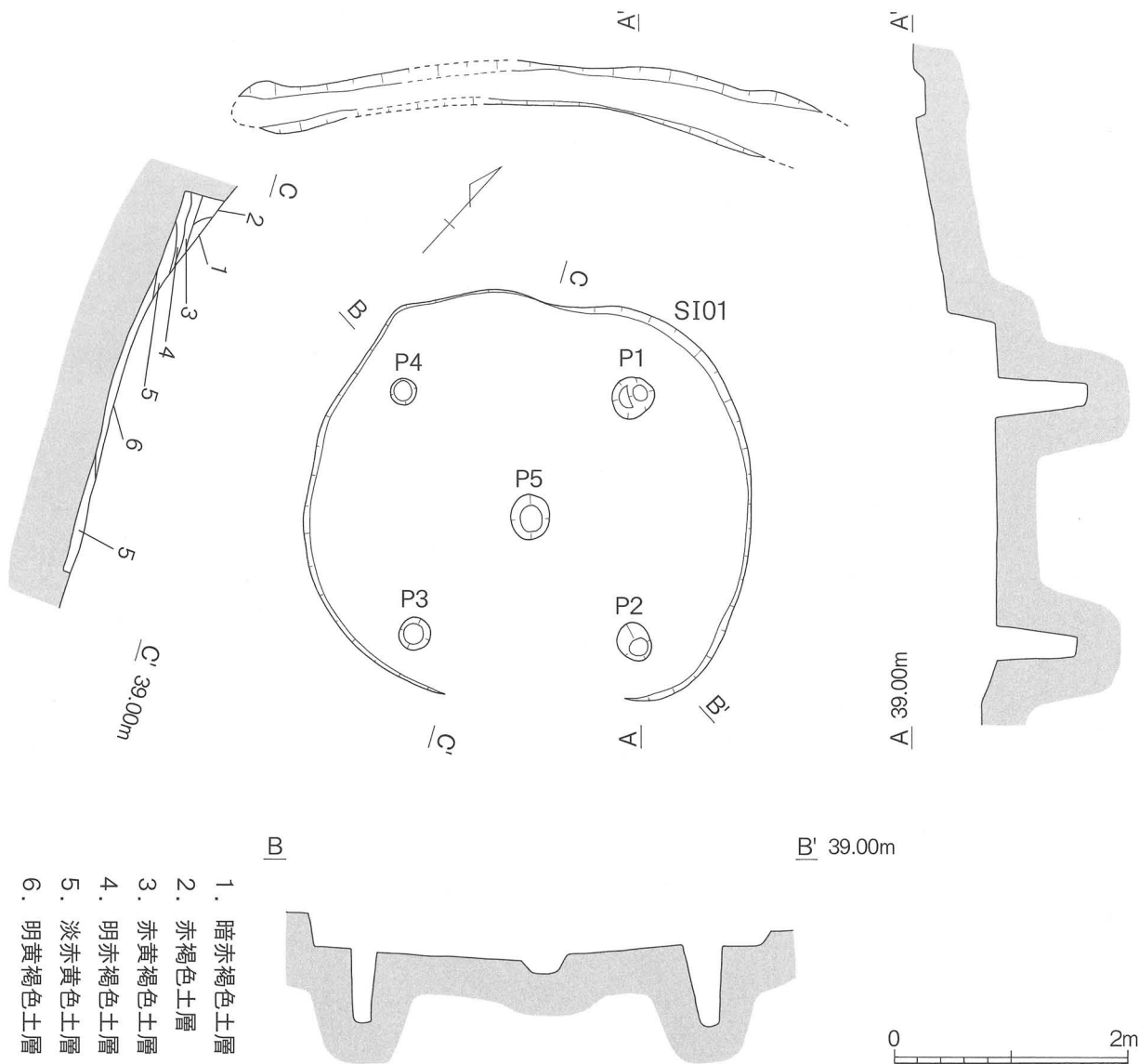
第 18 図 遺構外出土石器実測図 (S=1/3)



第 19 図 遺構外出土宝篋印塔実測図 (S=1/3)



第 20 図 II 区遺構配置図 (S=1/300)



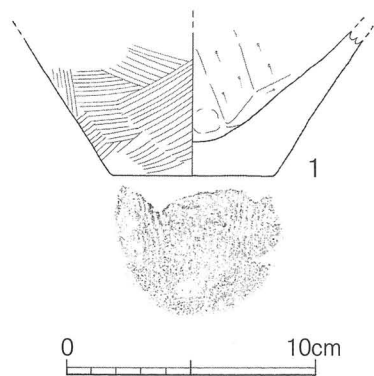
## 第2節 II区調査区

### SI01 (竪穴住居跡) (第21図)

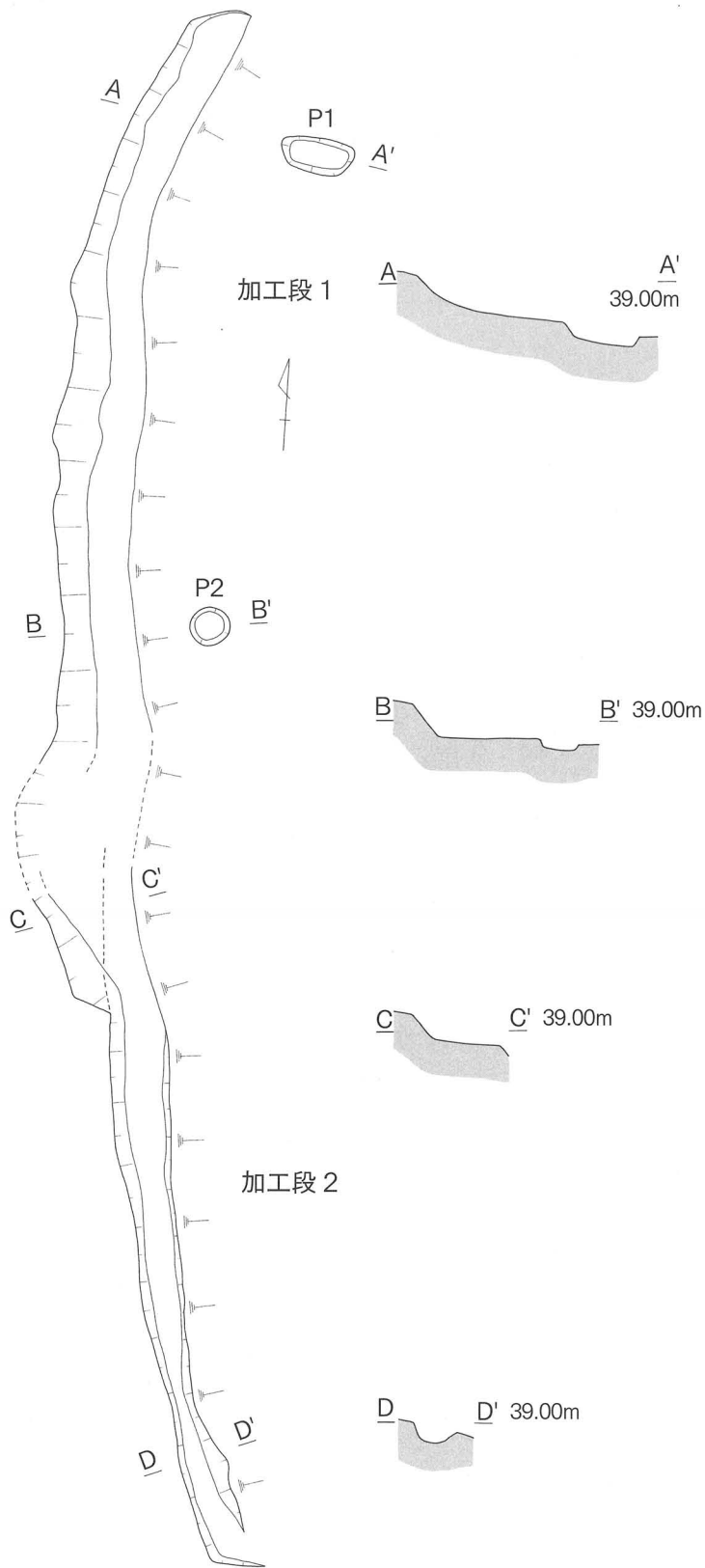
SI01 はII区調査区的最南端の位置で検出された。

標高 38.50m 付近にその位置を測る。山頂尾根部分から南に向かって緩やかに下がる斜面の始点付近で検出された。これより下の斜面は伐採作業の際に機械の削平を受けたため遺構の存在は確認できない。隅丸方形の住居跡で、東西 3.85m、南北 3.85m、北側の最大壁高 43 cm、を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。斜面の下部になる南側には、住居跡の壁は残っていない。

住居跡の床面からは5個のピットが検出された。うち柱穴はP1からP4であり、その位置は東西南北にほぼ







第 23 図 II 区加工段 1・2 実測図 (S=1/40)

当たっている。その間隔は P 1 ~ P 2 で 2.15m、P 2 ~ P 3 で 1.95m、P 3 ~ P 4 で 2.05m、P 4 ~ P 1 で 2.03m である。各ピットの上縁部の径は 23 cm ~ 37 cm、深さ 36.5 cm ~ 75.5 cm を測る。住居跡のほぼ中央に P 5 がある。上縁部の径は 40.0 cm、深さ 15.0 cm で、その埋土は炭化物を含んでいた。住居跡の中央ピットと考えられる。

#### 出土遺物 (第 22 図)

SI01 では、中央ピット P 5 内から弥生土器の甕の底部が 1 個出土した。平底の甕の底部だと思われる。外面には不正方向の刷毛目を施す。内面はヘラ削りを施し、内面底部には指頭圧痕及びナデ痕も観察できる。外面及び内面底部には一部ススが付着し黒くなっている。

#### 溝 (SD01) (第 21 図)

住居跡から北側へ約 1.5m 離れたところに幅約 30 cm、深さ約 15 cm の直線状の溝が検出された。この溝は東西方向に 4.95m 延びている。断面は上場幅 48.0 cm、下場幅 33.0 cm、深さ 8.0 cm を測る。SI01 に関連する遺構であると考えられる。出土遺物はなかった。

#### 加工段 1・2 (第 23 図)

II 区調査区のほぼ中央部分の東側に緩やかに下る斜面上で加工段を検出した。標高 38.75m から 39.00m を測る斜面上の部分で、壁面は南東方向に延びている。壁

の高さは最大 20 cm、斜面南側を断面 L 字状にカットして平坦面を設けている。加工段の全長は 8.50m であるが、2 段の加工段が重なっているものと思える。先行トレンチにより全容がわからないためこの加工段が全体で一つのものなのか、二基の加工段が繋がっているものなのかははっきりしない。北側にある加工段 1 の斜面下の平坦面には 2 つのピットを検出した。ピットはいずれも加工段の近くにあり、それぞれ P 1 は径 79.0 cm、P 2 は径 43.0 cm、深さは P 1 で 7.5 cm、P 2 で 5.0 cm である。加工段とピットの関連は不明である。

加工段から遺構に伴う遺物は出土しなかった。したがってこの 2 段の加工段の作られた時期や性格は不明である。

## 土壌 (SK01 ~ SK08)

II 区調査区中央部付近で 8 基の土壌を検出した。8 基の土壌の関連がはっきりわからないので、それぞれの遺構の概要を説明する。

### SK01 (落とし穴) (第 24 図)

標高 40.00m から 40.25m を測る位置で検出した。楕円形を呈し、底部がほぼ平坦で逆台形状に立ち上がる壁面を持つ。上縁部の長径 127 cm、短径 72 cm、底部の長径 60 cm、短径 36 cm、その深さ 129.7 cm を測る。底部はかなり深く最終的に掘り上げることができなかった。しかし底部中央に落とし穴と見て取れる痕跡があった。遺物は出土していない。

### SK02 (第 25 図)

標高 39.75m から 40.00m の地点で検出した。ほぼ楕円形を呈し、上縁部径は 135 cm から 80 cm、底部径 127 cm から 60 cm、最深部で 12 cm の深さを測る。底部からピット 2 個が検出された。P 1 は最大径 20 cm、深さ 9 cm、P 2 は最大径 17 cm、深さ 8 cm を測る。遺物は出土していない。

### SK03 (第 25 図)

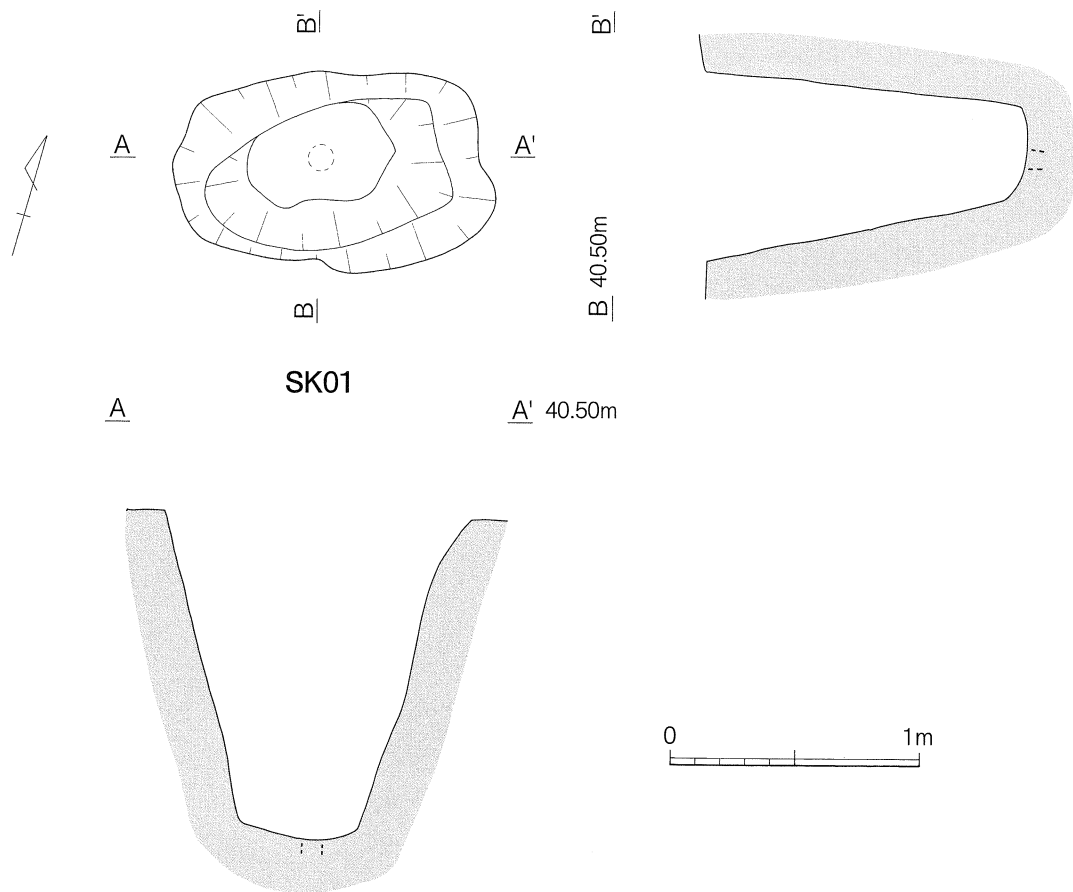
SK02 の東側、標高 40.00m の地点で検出された。楕円形を呈するものと思われるが、先行トレンチにより破壊され全容はわからない。上縁部の長径は約 217 cm、短径は測定不可能である。遺物の出土はない。

### SK04 (第 25 図)

SK03 の北側に隣接する位置で検出した。上縁部の長径は 134 cm、短径は 44 cm、最深部の深さ 26 cm を測る。遺物は出土していない。

### SK05 (第 25 図)

SK04 の北側に隣接する位置で検出した。不定形を成す。最深部の深さ 10 cm、上縁部の長径で 134 cm、短径で 21 cm から 62 cm を測る。遺物の出土はない。



第 24 図 II 区 SK01 実測図 (S=1/30)

### SK06 (第 26 図)

標高 39.75m から 40.00m を測る位置で検出した。セクションにより一部破壊され定かでないが、不定形を成す。底部中央にピットがある。上縁部の長径は 358cm、短径は 290cm、底部の長径は 88cm、短径 54cm である。底部中央のピットは長径 26 cm、短径 18 cm を測る。深さは 30.5 cm であるが、上縁部から底部までの深さは最も深いところで 34 cm である。遺物の出土はなかった。

### SK07 (第 26 図)

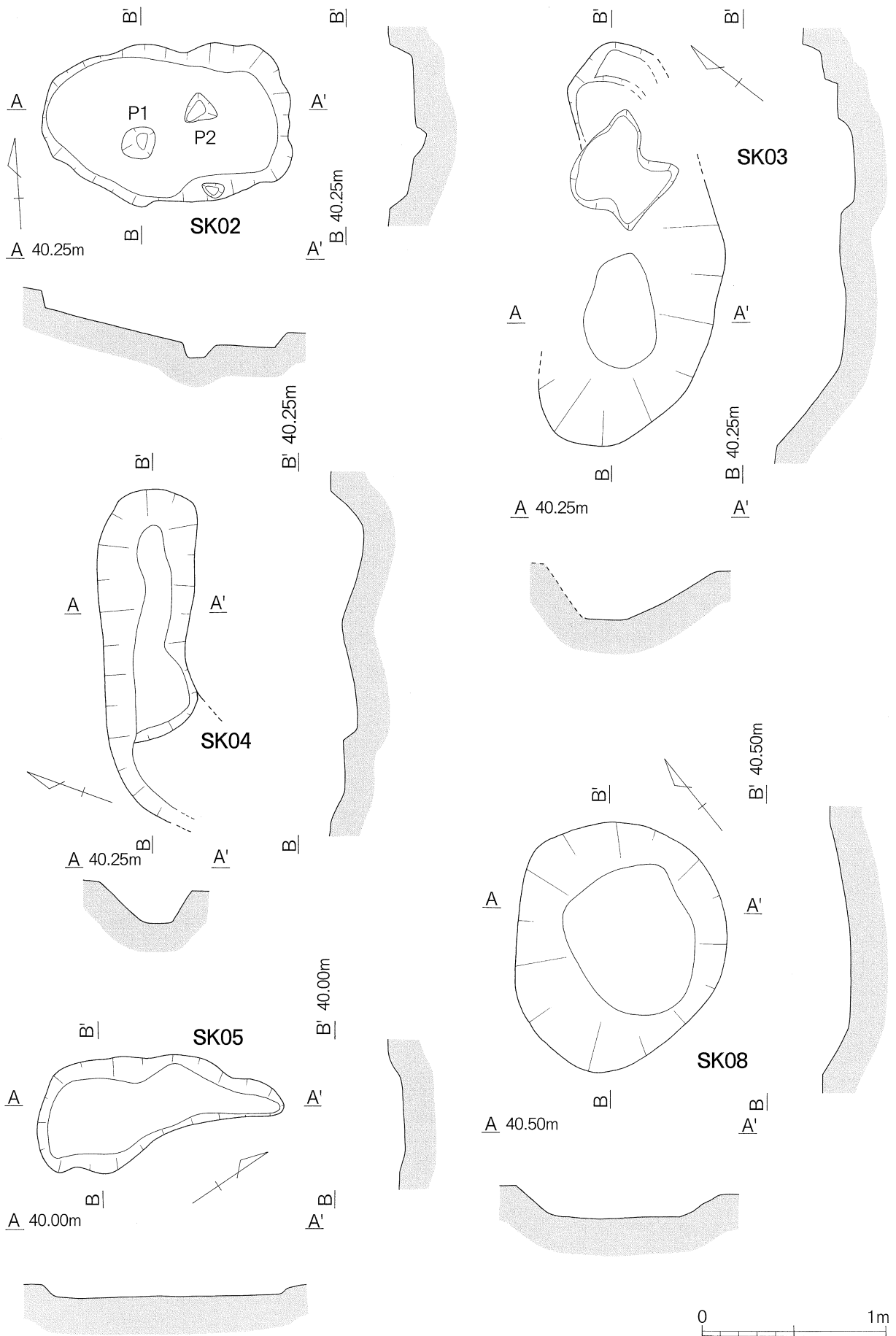
SK06 の東北、標高 40.00m から 40.25m を測る位置で検出した。セクションによる破壊で定かでないが、円形また楕円形だったのではないかと思える。底部中央にピットがある。上縁部径は 410cm を測る。底部の長径は 118cm、短径は 112cm、上縁部から底部の深さ 35 cm である。底部中央ピットは長径 18 cm、深さは 24 cm である。遺物の出土はなかった。

### SK08 (第 25 図)

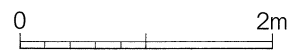
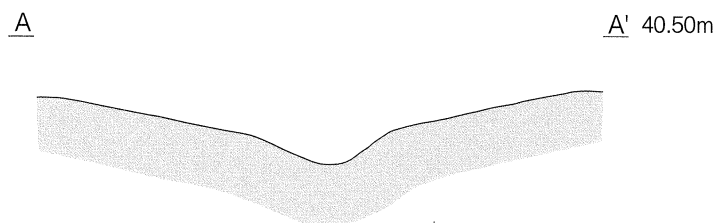
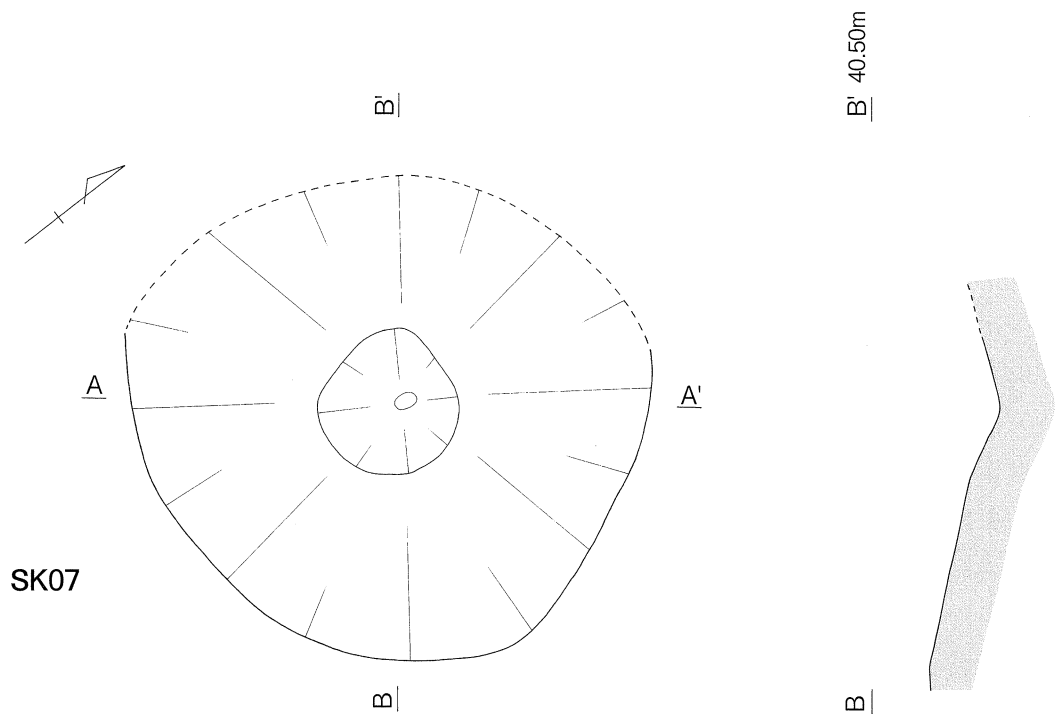
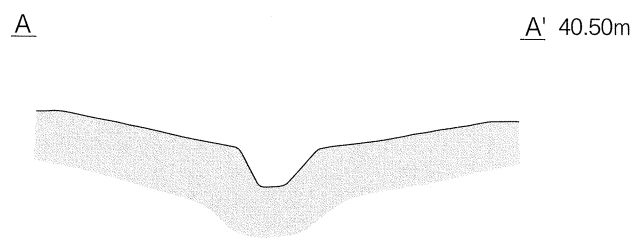
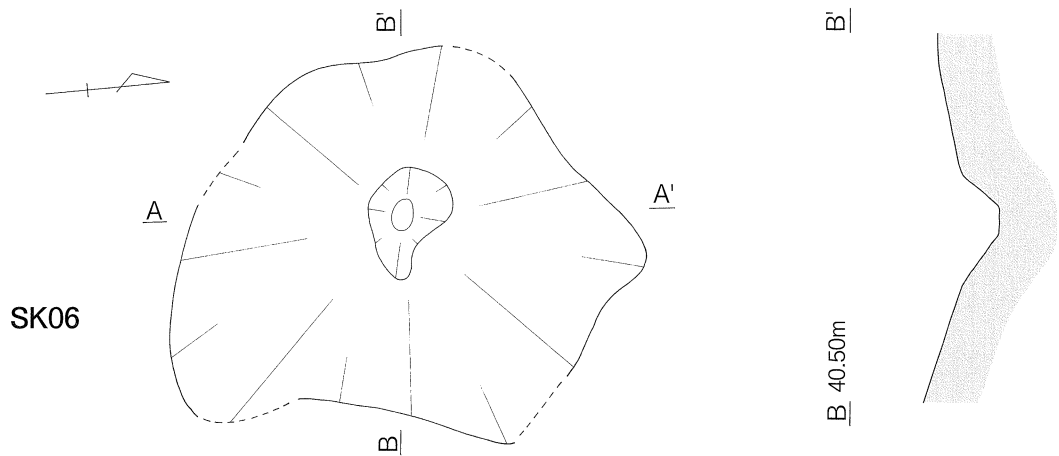
標高 40.25m を測る位置で検出した。楕円形を呈し、上縁部の長径が 55 cm、短径が 48 cm、深さ 20.5 cm を測る。遺構内より焼土が確認された。遺物の出土はなかった。

II 区調査区の北西部では、上記の 8 つの土壌の他に 4 つのピットを検出した (P 6 ~ P 9) が遺構に伴うものではないと思える。

P 6 は、上縁部径が 62 ~ 72 cm、深さ 14.5 cm を測る。P 7 は、上縁部径が 38 ~ 44 cm、深さ 7



第 25 图 II 区 SK02 · 03 · 04 · 05 · 08 実測図 (S=1/30)



第26图 II区 SK06·07 实测图 (S=1/60)

cmを測る。P 8は、76～122 cm、深さ 13.5 cmを測る。P 9は、74～88 cm、深さ 10.5 cmを測る。遺物の出土はそれぞれなかった。

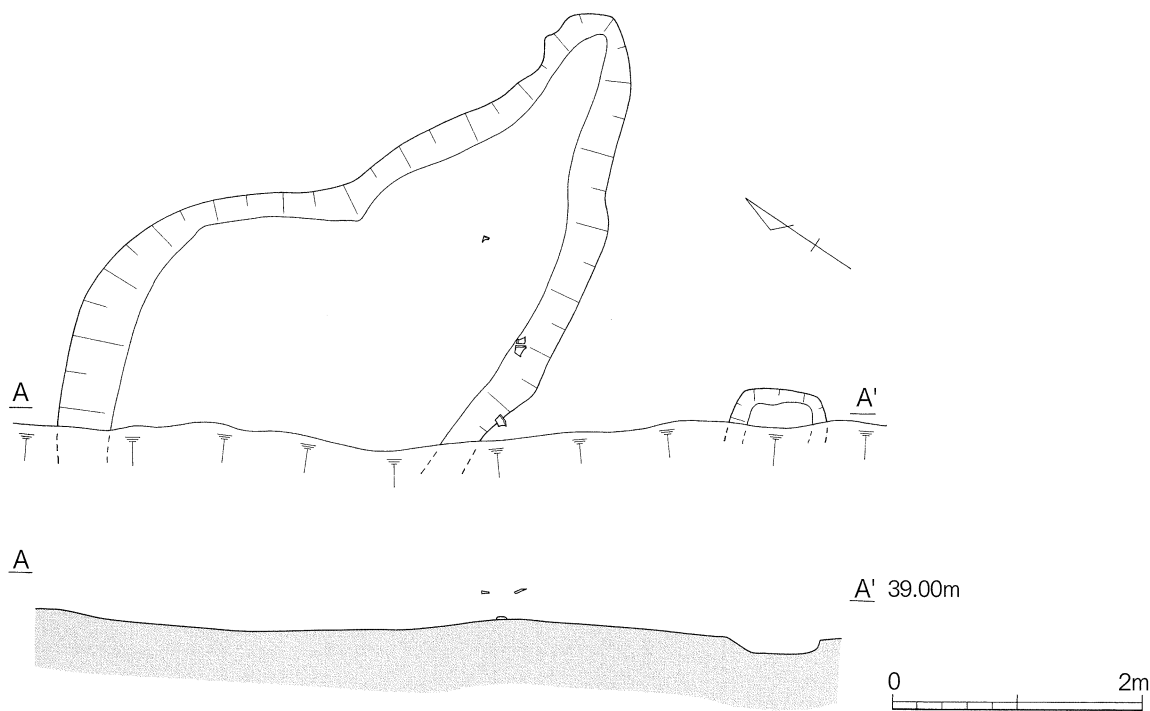
### SX01（第 27 図）

Ⅱ区調査区西側中央部付近では、溝状の遺構が確認された。標高 39.0m 付近で検出された遺構は、平坦面に掘りこまれた深さが最大 22.30 cm、最大幅 35.0 cm程度の溝である。溝状遺構の南側約 3m 離れたところにも深さ約 20 cmの土壇状の遺構がある。伐採作業のパイロット工事で、遺構の西側部分が破壊されたため、その全容は確認できない。

#### 出土遺物

SX01 内からは須恵器片が数点出土した。

SX01 南端付近から土師質土器 1 点、須恵器が 2 点出土した。土師質土器は高台の部分と考えられる。須恵器は甕片の胴部と考えられる。1 個の外面には自然釉が付着している。



第 27 図 Ⅱ区 SX01 実測図 (S=1/60)

## 第4章 まとめ

今回、古城山遺跡は谷を挟んで東側にあるⅠ区調査区と西側にあるⅡ区調査区の2つの調査区で発掘調査を行った。Ⅰ区調査区の東側はまだ発掘調査が行われていない部分もあり、その調査報告は次年度以降に待たなければならない。この項では発掘調査の終了したⅡ区調査区、Ⅰ区調査区の一部についてまとめてみた。

Ⅰ区調査区の発掘調査は、結果として、横穴墓1穴、竪穴住居跡1棟、加工段6段、ほかに古い山道が検出された。時代的には弥生時代後期から古墳時代の遺構が、Ⅰ区調査区から検出された。

横穴墓は、Ⅰ区調査区の南西側の斜面から1穴検出された。玄室はほぼ正方形のドーム形で、羨道をもつ、いわゆる意字型と呼ばれる形態の横穴墓であると思われる。玄室内にあった副葬品の出土遺物は、須恵器（蓋坏）10点、鉄器（刀子）1点である。土器の形態からA4型の特徴を持つ土器で出雲3～4期のものと思われる。

今回の調査では、調査区のほぼ南端の位置で、この1穴のみが検出されたが、この古城山の周辺には横穴墓群があることがわかっている。中海側に面した古城山の北側斜面付近には、昭和40年代の出雲郷小学校建設工事の際、1穴発見されて、発掘調査された。玄室が正方形のドーム形の横穴墓で、勾玉、須恵器など遺物が大量に検出された。やはり同じ北側丘陵部の斜面付近では平成元年、出雲郷小学校体育館建設工事の際に、横穴墓群が見つかり、発掘調査を行った。この時の調査では横穴墓6穴の存在が確認され、やはり須恵器を中心とした大量の遺物が検出された。今回調査した横穴墓は以前調査した場所とは反対側で、横穴墓が検出されたのは初めてである。さらに谷の奥側には新たな横穴墓が存在する可能性はある。古城山から範囲を広げて見ても、姫津谷横穴墓群、内馬池横穴墓群、さらに安来道路建設に伴う島田池遺跡、渋山遺跡池古墳群などでの発掘調査で大量の横穴墓が調査され、横穴墓群が形成されていたことがわかっている。古城山周辺も横穴墓群として以前から知られていたが、その全容が明らかになりつつある。なお平成元年に行われた古城山横穴墓の発掘調査については、今回の調査区から外れているため、この報告書ではこれ以上触れないが、次回の報告書では発掘調査の詳細を掲載したいと思う。

竪穴住居跡はⅠ区で1棟のみ検出された。Ⅰ区の竪穴住居跡の平面プランは隅丸方形である。時期的には弥生後期末のものと考えられる。ただこの住居跡1棟のみで、集落が形成されていたわけではない。

加工段については、Ⅰ区で6段検出された。Ⅰ区の加工段3～6は山頂部の北端で互いに切り合う形で作られており、意宇平野から中海を望む眺望のひらけた場所に隣り合って作られている。古城山遺跡は、Ⅰ区調査区のA・B両調査区の調査を終えた。しかし残りの調査区の調査がまだ終了していない。残りの調査は次年度以降に持ち越しとなっている。古城山遺跡の全容を把握するには、その調査を待つてからにしたい。

Ⅰ区では、遺構外からも多数の遺物が出土した。その遺物は石器、弥生土器、須恵器、青磁器など種類が多く、時代も幅広い。

Ⅱ区調査区は、西側丘陵の尾根上に所在し、竪穴住居跡、溝、加工段、土壙などの遺構が検出された。竪穴住居跡は、調査区の南側で1棟のみの検出であった。形態は隅丸方形で、中央ピットから弥生土器の甕底部が検出されていることから、弥生時代後期の住居跡ではないかと考えられる。この調査区は一部削平を受けていて、竪穴住居跡はこの1棟なのか、それ以上あるのかはわからない。

Ⅱ区調査区は、多数の土壙も検出された。SK01は深い落とし穴で、それ以外は不定形または円形の土壙であり、不明なものが多い。そのうちSK06とSK07は、すり鉢状の土壙で遺物の出土もなくどういふものなのかわからなかった。これに関しては、地元の方から、戦時中にこの近辺にあった青年学校で軍事訓練に使うために掘られたものではないか、とのお話を聞かせてもらった。

P6～9に関してはそれぞれが独立したピットとして扱っているが、SK08を含めて等間隔で並んでいるものとも見て取れる。しかし掘立柱建物跡である確証がないので単独のピットとして紹介している。

SX01は、当初、古墳の周溝ではないかと思っていたが、大部分が削平を受けている状況で、主体部が確認できなかった。

#### 参考文献

- 東出雲町誌編纂委員会 『東出雲町誌』 1978年  
島根県教育委員会 『島根県埋蔵文化財調査報告書 第I集』 1969年  
山陰横穴墓研究会 『第7回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域性—』 1997年  
門脇俊彦 『古代文化叢書8 山陰地方における古墳群と地域社会』 2002年



古城山遺跡 I 区調査区出土遺物観察表 (土器)

挿図 番号	写真 図版	出土 地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 整	胎 土	色 調	焼成	備 考
5-1	8	SI01	弥生	甕 (底部)	—	—	7.0	内：ヘラケズリ 外：風化のため不明	1 mm程の砂粒多い	内：橙 外：黒褐色	良好	
5-2	8	SI01	弥生	甕 (底部)	—	—	6.6	風化のため不明	1 mm以下の砂粒含む	内：黒褐色 外：黒褐色	良好	
7-1	8	加工段1	弥生	甕	14.8	—	—	風化のため不明	3 mm大の砂粒含む	内：明褐 外：黄褐・明褐色	不良	
7-2	8	加工段1	土師器	鼓形器台	—	—	25	内：ヘラケズリ 外：風化のため不明	0.5 mm以下の砂粒多い	内：橙 外：鈍い黄橙	不良	
9-1	8	加工段6	弥生	甕 (底部)	—	—	8.6	内：ヘラケズリ 外：風化のため不明	1 mm以下の砂粒含む	内：黒褐色 外：暗赤褐色(朱が付着か)	良好	内面底部に指頭圧痕
9-2	8	加工段6	弥生	甕 (底部)	—	—	6.0	風化のため不明	1 mm以下の砂粒含む	内：鈍い橙 外：橙	やや不良	
12-1	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	蓋	12.9	4.2	—	内：回転ナデ 後ナデ 外：天井部回転 ヘラケズリ	密 0.5 mm以下の砂粒含む	内：灰色 外：灰色	良好	A 4 型
12-2	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	蓋	12.3	3.6	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密 1 mm大の砂粒わずかに含む	内：灰色 外：灰色	良好	付着物あり A 4 型
12-3	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	蓋	12.8	4.3	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密 1 mm大の白い砂粒わずかに含む	内：灰色 外：灰色	良好	A 4 型
12-4	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	蓋	12.5	4.0	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密	内：灰色 外：灰色	良好	付着物あり A 4 型
12-5	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	蓋	12.3	3.8	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密 0.5 mm以下の砂粒含む	内：灰色 外：灰色	良好	付着物あり A 4 型
12-6	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	坏	10.6	3.7	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密 0.5 mm以下の砂粒含む	内：灰色 外：灰色	良好	A 4 型
12-7	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	坏	10.9	4.2	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密	内：灰色 外：灰色	良好	A 4 型
12-8	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	坏	10.2	3.7	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密	内：灰色 外：灰色	良好	A 4 型
12-9	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	坏	11.5	4.2	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密	内：灰色 外：灰色	良好	外面底部にヘラオコシ痕
12-10	9	横穴墓 (玄室)	須恵器	坏	10.2	3.9	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ	密	内：灰色 外：灰色	良好	付着物あり
14-1	10	山道	土師質土器	皿	8.1	1.9	—	外面底部は押圧による整形	密	内：浅黄橙 外：鈍い橙	やや不良	京都系土師器皿

挿図 番号	写真 図版	出土 地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 整	胎 土	色 調	焼成	備 考
14-2	10	山道	土師質 土器	皿	8.8	1.8	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：橙 外：橙	やや 不良	京都系 土師器皿
14-3	10	山道	土師質 土器	皿	9.2	1.9	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	密 微砂粒 含む	内：橙 外：鈍い橙	良好	京都系 土師器皿
14-4	10	山道	土師質 土器	皿	9.0	1.7	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	密	内：鈍い橙 外：鈍い橙	やや 不良	京都系 土師器皿
14-5	10	山道	土師質 土器	皿	9.4	1.6	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ		内：橙 外：浅黄橙	良好	京都系 土師器皿
14-6	10	山道	土師質 土器	皿	8.4	1.6	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：鈍い橙 外：橙	不良	京都系 土師器皿
14-7	10	山道	土師質 土器	皿	8.8	1.5	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：鈍い橙 外：鈍い橙	やや 不良	京都系 土師器皿
14-8	10	山道	土師質 土器	皿	9.1	1.9	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	密	内：橙 外：橙	良好	京都系 土師器皿
14-9	10	山道	土師質 土器	皿	8.8	1.8	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：鈍い橙 外：橙	不良	京都系 土師器皿
14-10	10	山道	土師質 土器	皿	9.0	1.9	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：鈍い橙 外：橙	やや 不良	京都系 土師器皿
14-11	10	山道	土師質 土器	皿	9.0	2.0	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	1 mm以下の 砂粒含む	内：浅黄橙 外：鈍い橙	良好	京都系 土師器皿
14-12	10	山道	土師質 土器	皿	11.8	2.3	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	密	内：鈍い橙 外：鈍い橙	良好	京都系 土師器皿
14-13	10	山道	土師質 土器	皿	11.8	2.4	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	1 mm以下の 砂粒含む	内：鈍い橙 外：橙	不良	京都系 土師器皿
14-14	10	山道	土師質 土器	皿	11.7	2.4	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	密	内：鈍い橙 外：橙	やや 不良	京都系 土師器皿
14-15	10	山道	土師質 土器	皿	11.7	2.4	—	外面底部は押 圧による整形、 ヨコナデ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：橙 外：橙	やや 不良	京都系 土師器皿
15-1	12	遺構外	弥生	壺	26.0	—	—	口縁部外面に 3条の擬凹線 文あり	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：鈍い黄 橙 外：橙、赤褐	やや 不良	後期初頭
15-2	12	遺構外	弥生	甕	—	—	—	内：ナデ 外：風化により不 明、4条の擬 凹線文あり	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：橙 外：明褐色	やや 不良	
15-3	12	遺構外	弥生	甕	16	—	—	ヨコナデ 口縁部に4～5 条の擬凹線文 あり	2 mm以下の 砂粒多く含 む	内：赤 外：明赤褐	やや 不良	

挿図 番号	写真 図版	出土 地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 整	胎 土	色 調	焼成	備 考
15-4	12	遺構外	弥生	甕	17.9	—	—	ヘラケズリ 3条の擬凹線 文あり	1mm程度の 砂粒含む	内：橙 外：橙	やや 不良	
15-5	12	遺構外	弥生	甕	16.2	—	—	ヨコナデ 外面に2条の 擬凹線文あり	2mm程度の 砂粒含む	内：黒褐色 外：黒褐色	やや 不良	
15-6	12	遺構外	弥生	甕	19.5	—	4.5	風化のため不 明	2mm程度の 砂粒含む	内：橙 外：橙	不良	
15-7	12	遺構外	弥生	甕	—	—	—	ヨコナデ 口縁外面に4 条の擬凹線文 あり	0.5mm以下 の砂粒含む	内：橙 外：橙	やや 不良	
15-8	12	遺構外	弥生	甕	19.0	—	—	ヨコナデ 口縁部外面に 7条の擬凹線 文あり	2mm以下の 砂粒含む	内：橙 外：橙	良好	後期中葉
15-9	12	遺構外	弥生	器台	19.0	—	—	ヨコナデ 外面に5条の 擬凹線文あり	2mm大の砂 粒含む	内：明黄褐 外：橙	やや 良好	外面に赤 色顔料付 着
15-10	12	遺構外	弥生	甕 (底部)	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：縦方向の ハケメ	2mm以下の 砂粒多く含 む	内：黒褐色 外：鈍い黄 橙	やや 不良	
15-11	12	遺構外	弥生	甕 (底部)	—	—	5.0	外面にハケメ、 風化のため不 明	0.5mm以下 の砂粒含む	内：明黄褐 色 外：明褐色	不良	
15-12	12	遺構外	弥生	甕 (底部)	—	—	3.6	風化のため不 明	1mm程の砂 粒含む	内：黒褐色 外：鈍い黄 褐色	不良	
16-1	12	遺構外	須恵器	蓋	12.9	4.4	—	内：回転ナデ 外：風化のた め不明	0.5mm以下 の砂粒含む	内：灰オリーブ 外：灰オリーブ	不良	
16-2	12	遺構外	須恵器	坏	11.4	4.2	—	内：回転ナデ 外：回転ヘラ ケズリ、 底部ヘラ オコシ	密 0.5mm 以下の白い 砂粒含む	内：灰色 外：灰色	良好	
16-3	12	遺構外	須恵器	坏	10.7	4.0	—	内：回転ナデ 外：ヘラオコ シ後ナデ	密	内：灰色 外：灰色	良好	内面に朱 が施され る
16-4	12	遺構外	須恵器	坏	12.4	4.1	8.1	内外：回転ナデ 底部：回転糸 切り	2mm以下の 砂粒多く含 む	内：黒褐色 外：鈍い黄 橙	良好	
17-1	12	遺構外	陶磁器	青磁碗	17.4	—	—	内外：回転ナデ 外面：蓮弁文	密	内外：青味 を帯び た緑色	良好	龍泉窯系

古城山遺跡出土遺物観察表（鉄器）

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)			備 考
12-11	9	横穴墓 (玄室)	鉄製品	刀子	10.5	1.5	0.35	13.8			

古城山遺跡出土遺物観察表（石器）

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 さ (g)				備 考
18-1	12	遺構外	石器	打製 石斧	19.4	11.1	2.1	527.0				
18-2	12	遺構外	石器	敲石	12.6	6.7	6.0	778.0				側面に敲 打あり

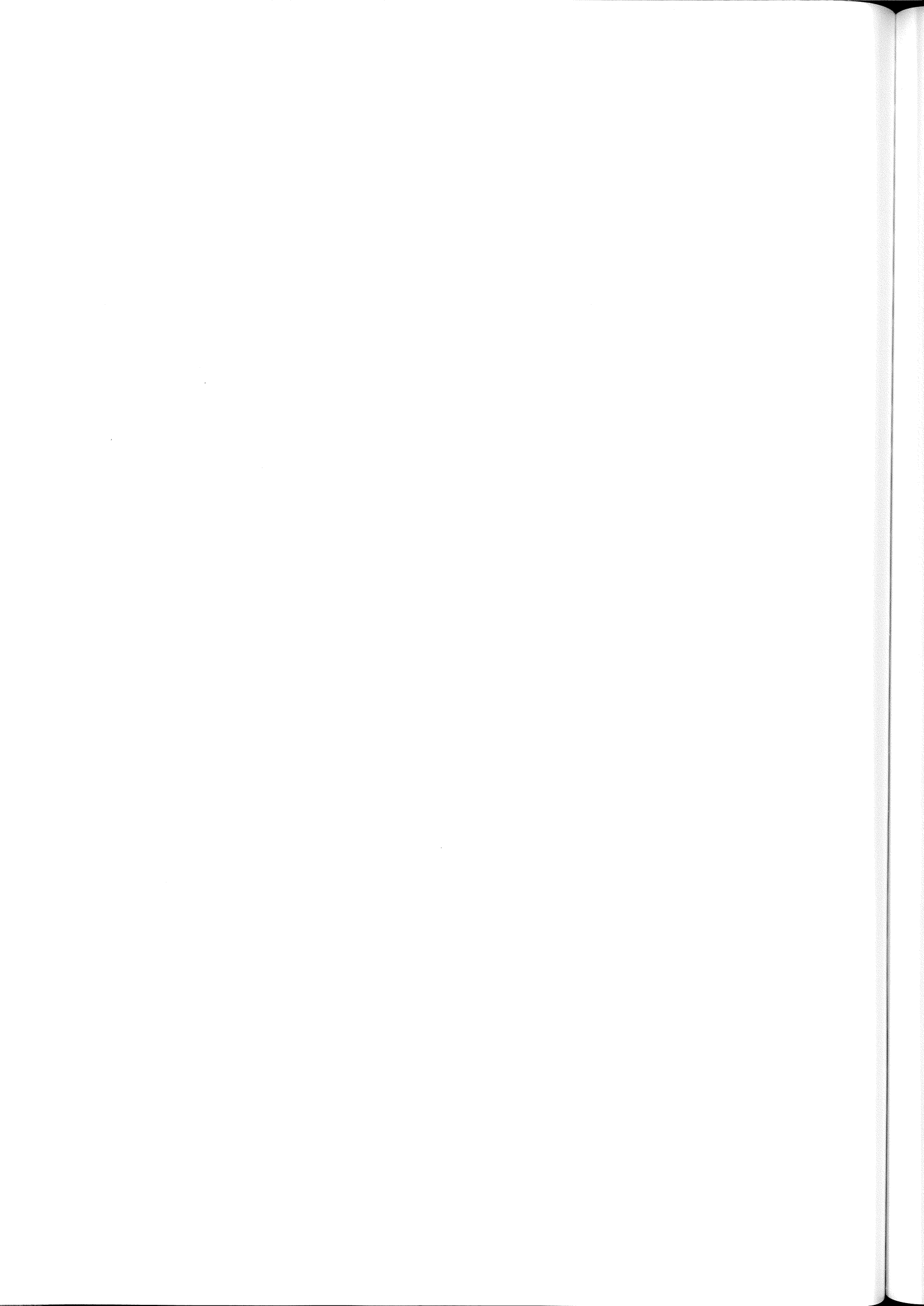
古城山遺跡出土遺物観察表（宝篋印塔）

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 さ (g)				備 考
19-1	12	遺構外	石器	宝篋 印塔	8.1	5.4	1.6	65.0				

古城山遺跡Ⅱ区調査区出土遺物観察表（土器）

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 整	胎 土	色 調	焼成	備 考
22-1	18	SI01	弥生	甕 (底部)	—	—	6.4	内：ヘラケズリ 外：ハケメ	0.5 mm以下 の砂粒含む	内：黄橙 (一部黒褐色) 外：黄褐色	良好	

圖 版





I区 調査区全景 (西より)



I区 調査区全景 (北より)

図版 2 (I 区調査区)



SI01 (南より)



加工段 1 (西より)





加工段 2 (下段 : 上段は SI01)



加工段 3 ~ 6 (西より)

図版 4 (I 区調査区)



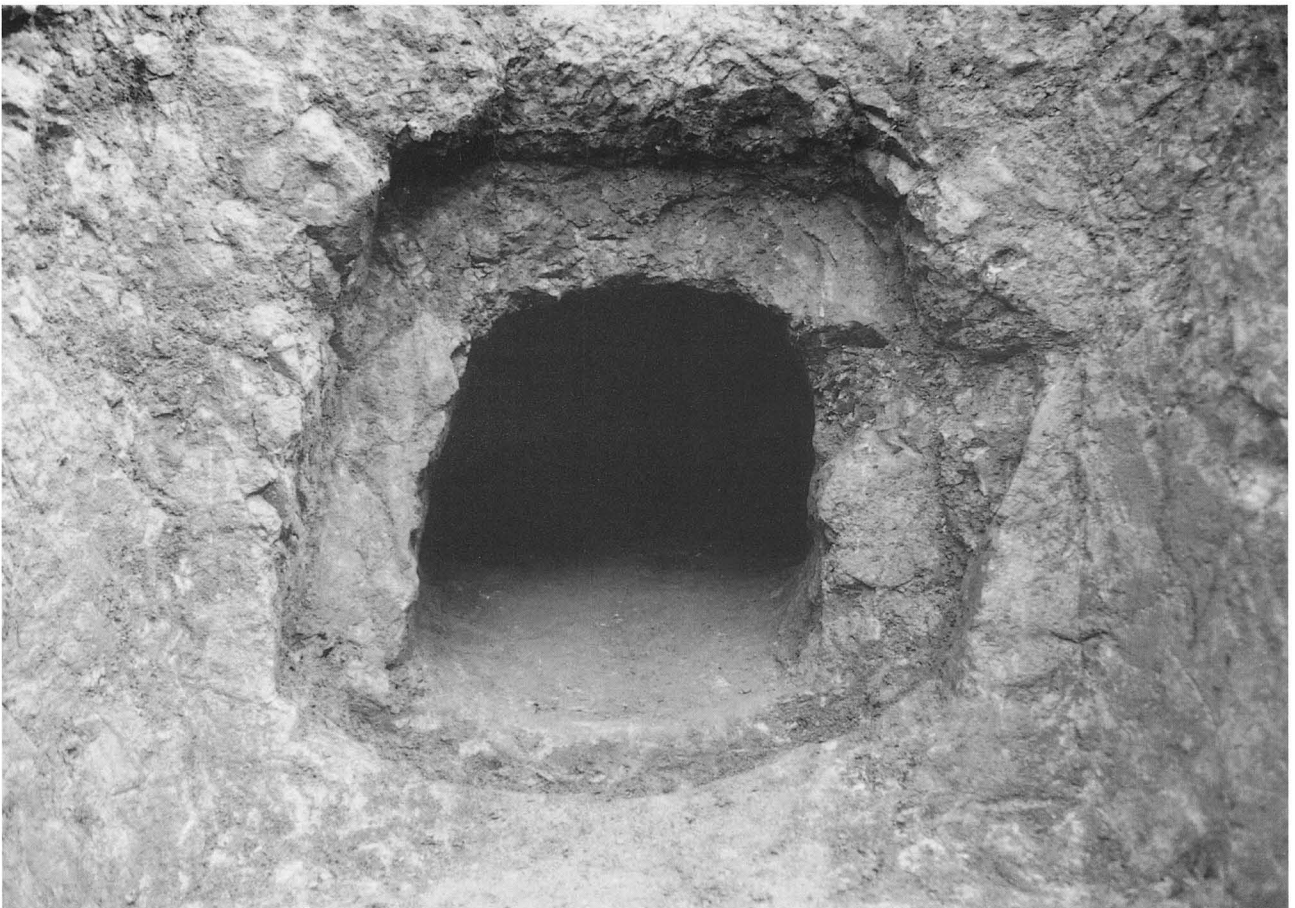
加工段 3～6 (北西より)



加工段 3～6 (北より)



横穴墓 全景 (西より)

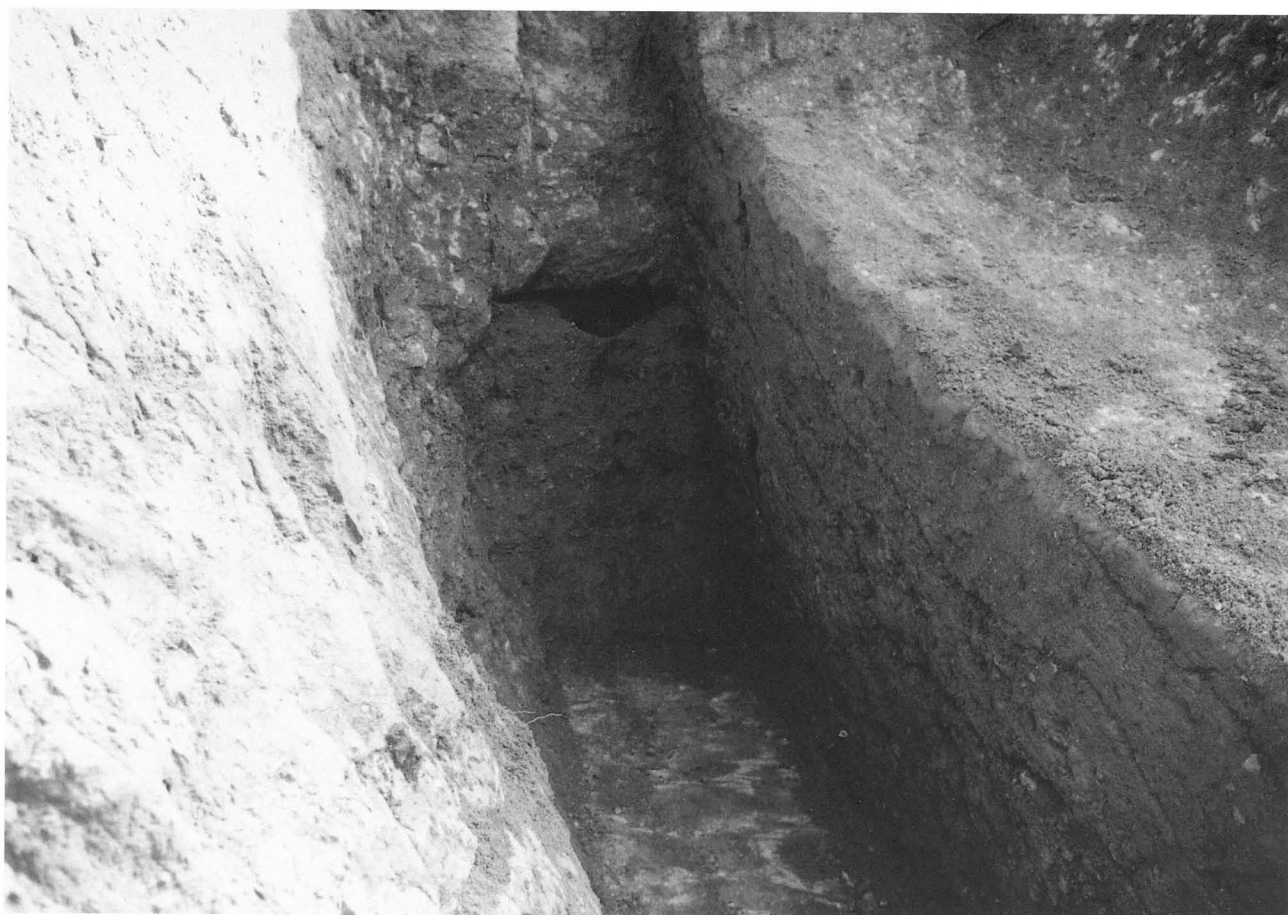


横穴墓 羨門部 (西より)

図版 6 (I 区調査区)



横穴墓 玄室内遺物出土状況 (左側)



横穴墓 縦断面土層堆積状況

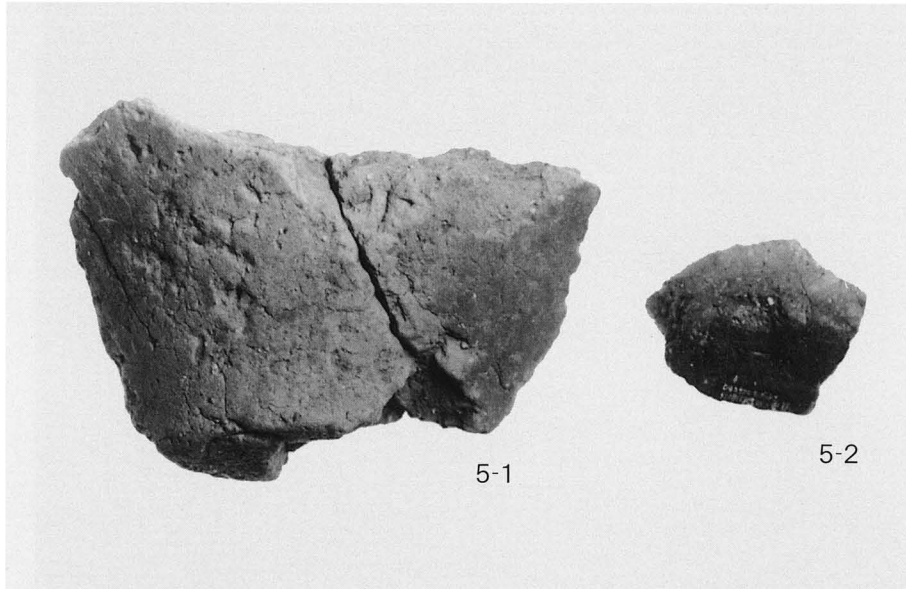


古山道 (北より)

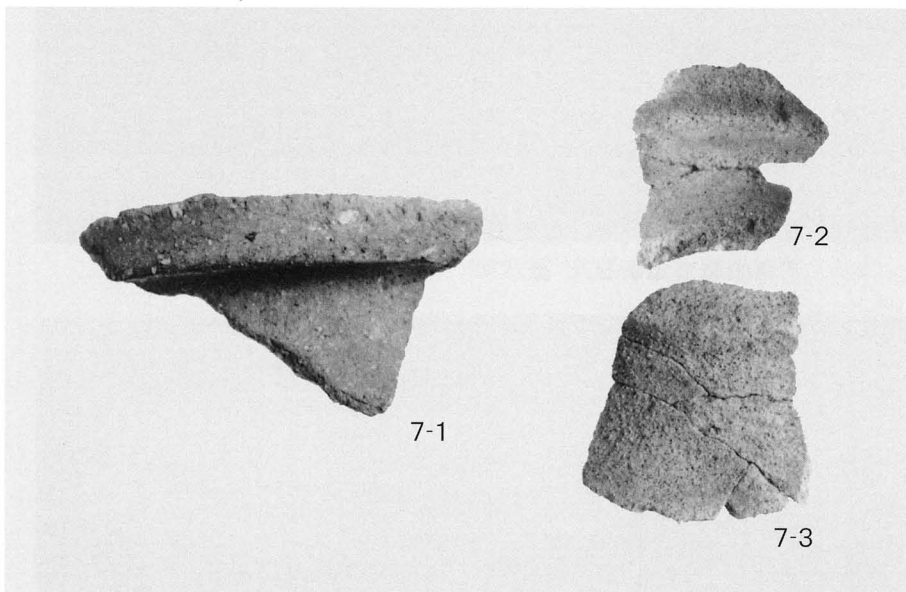


作業風景

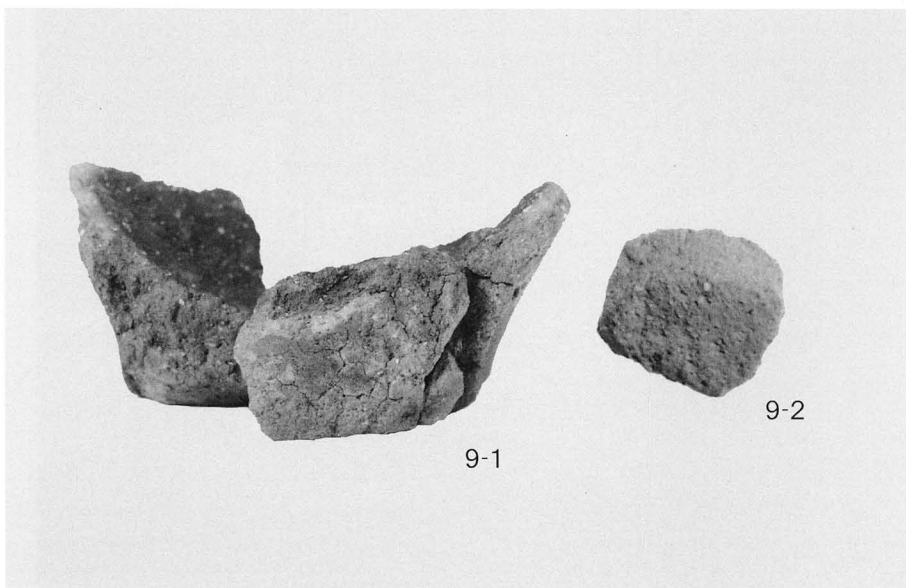
図版 8 (I 区調査区)



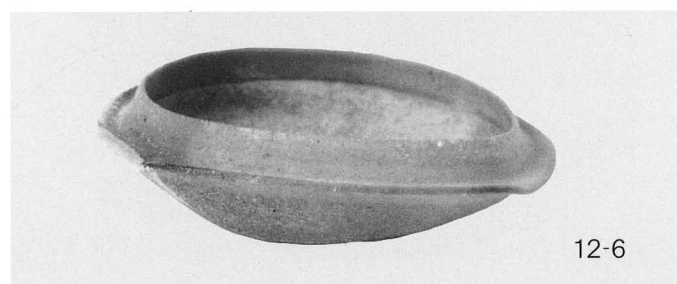
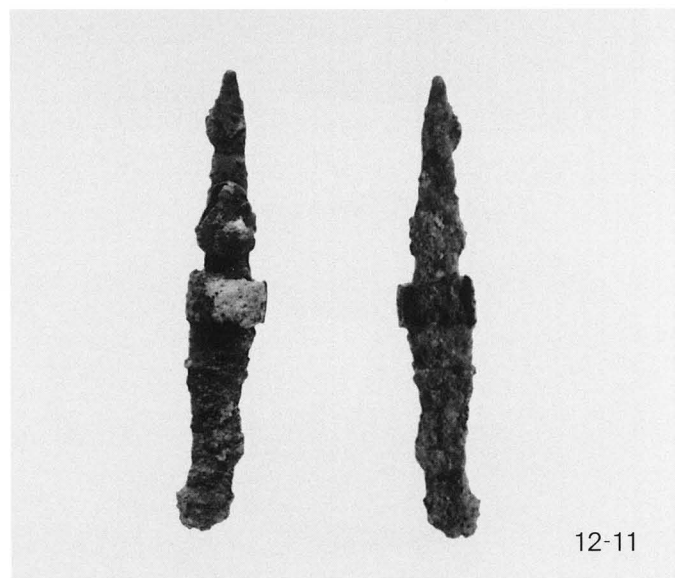
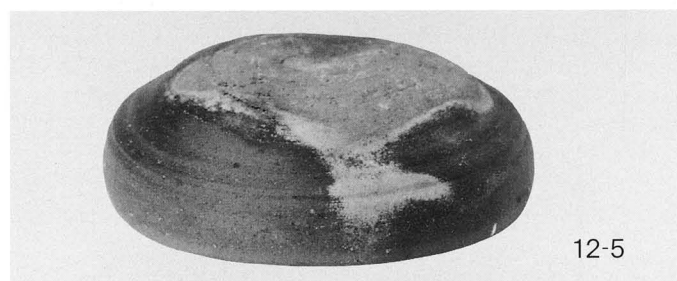
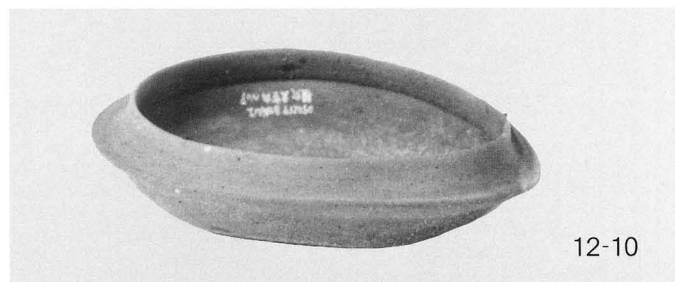
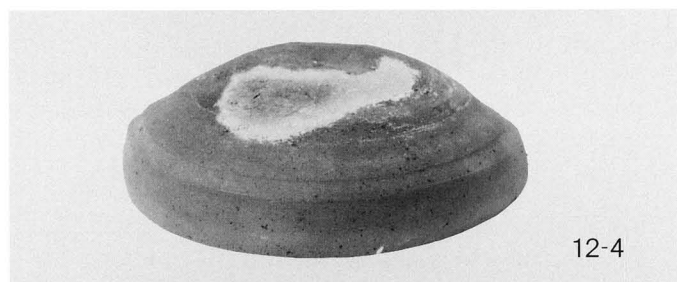
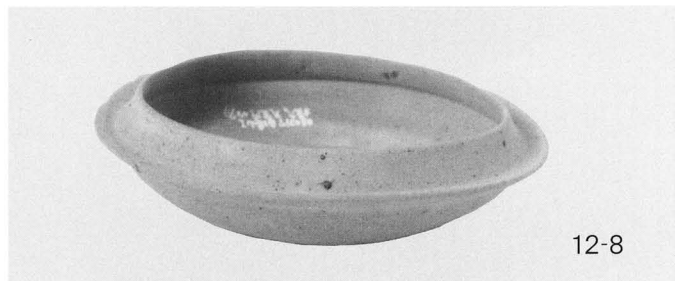
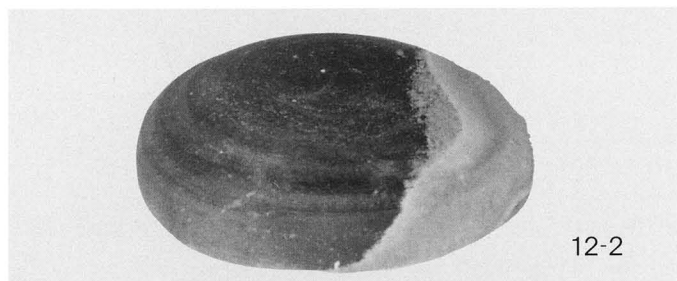
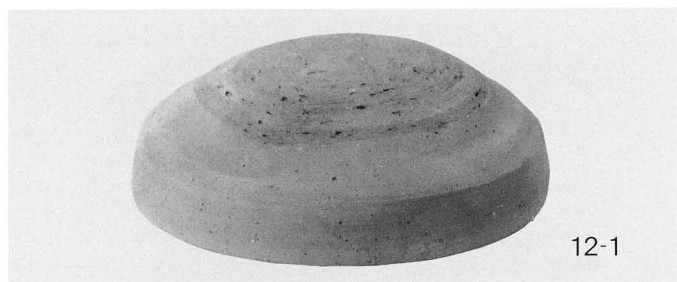
SI01 出土遺物



加工段 1 出土遺物

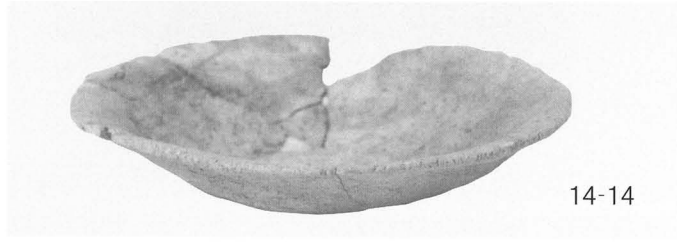
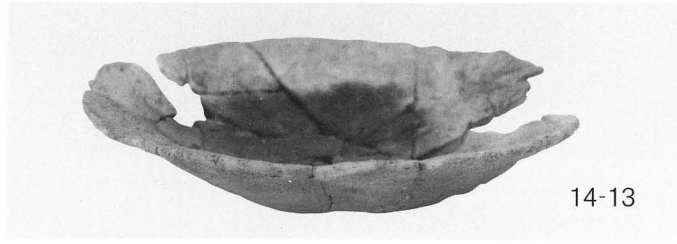
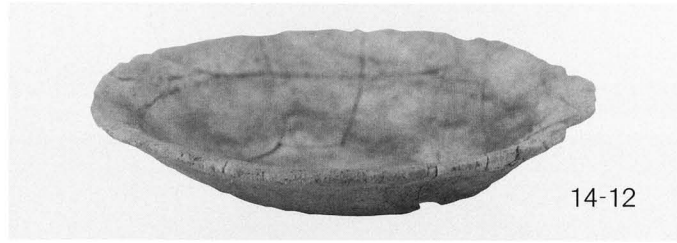
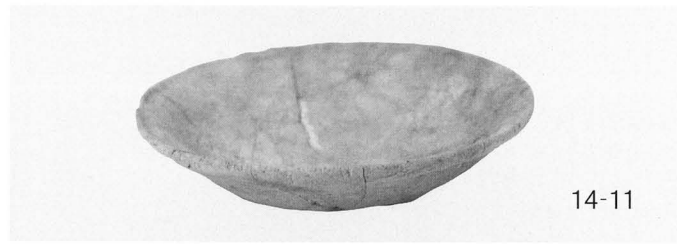
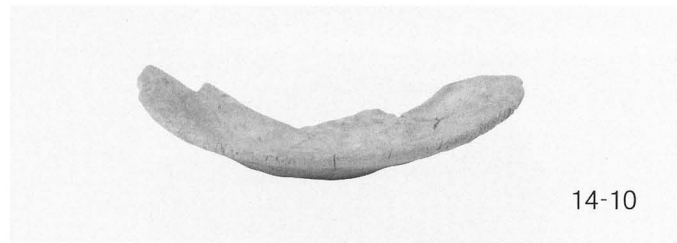
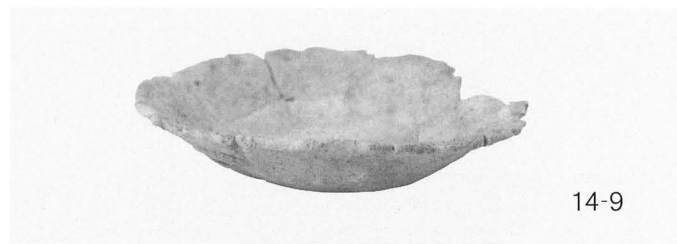
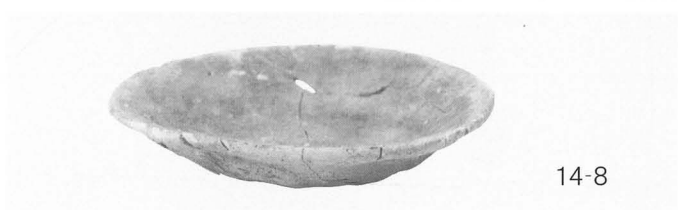
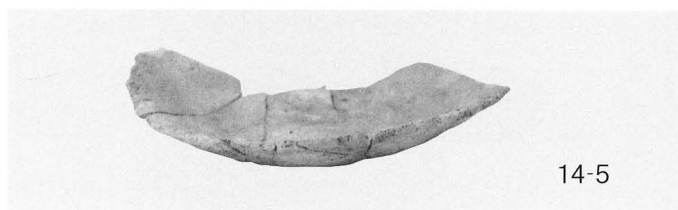
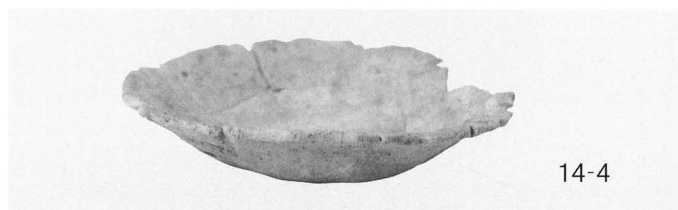
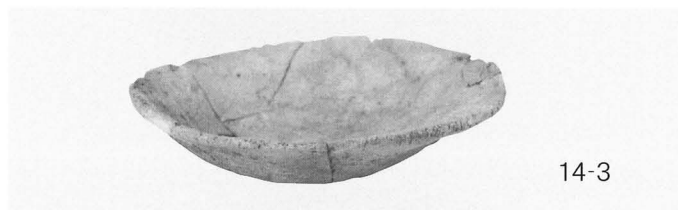
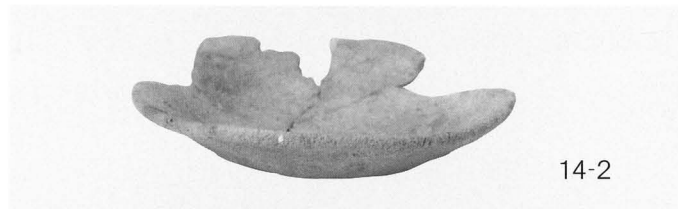
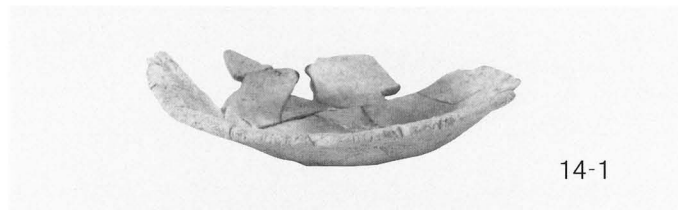


加工段 6 出土遺物



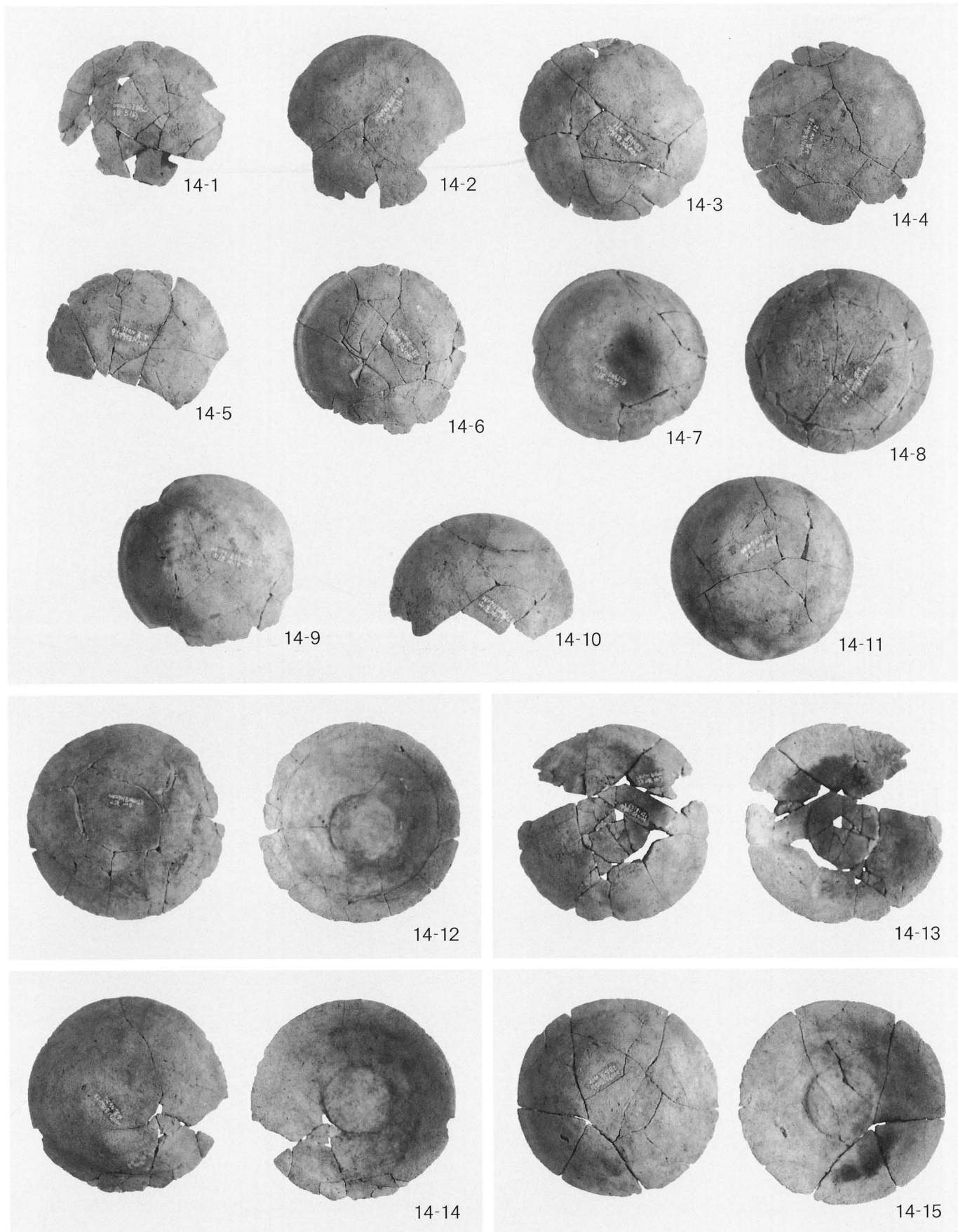
横穴墓玄室内出土遺物

図版 10 (I 区調査区)



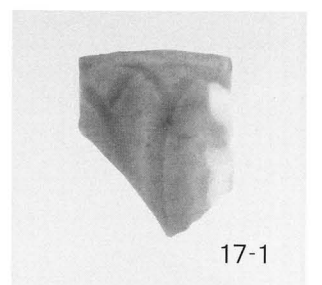
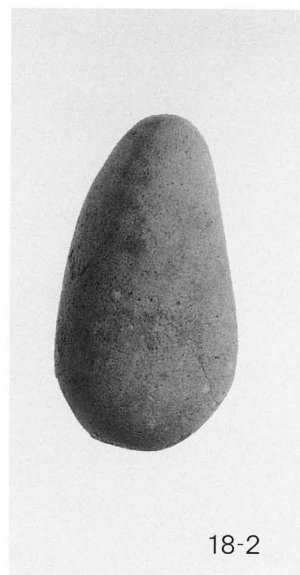
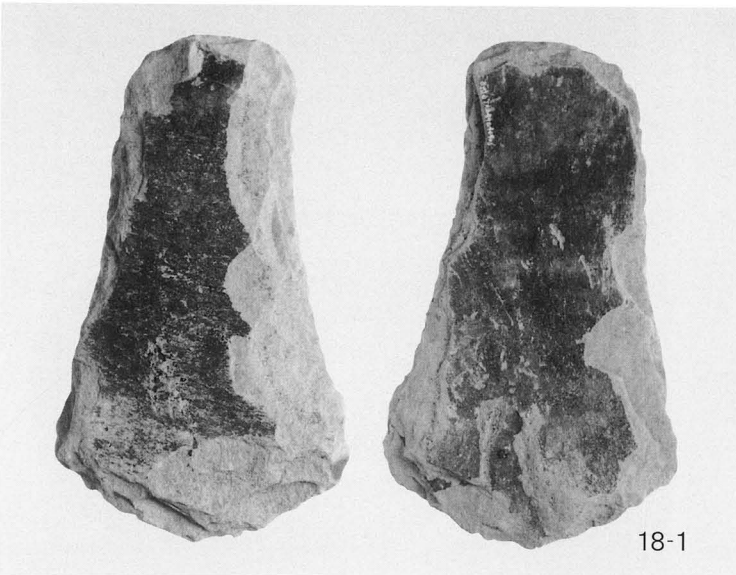
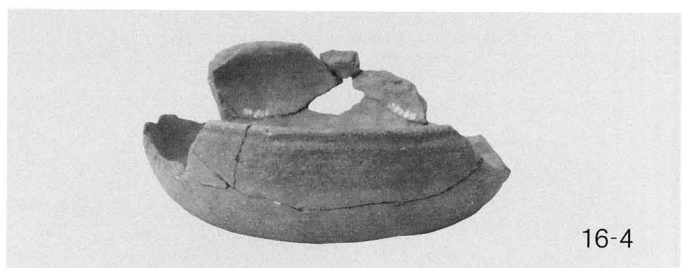
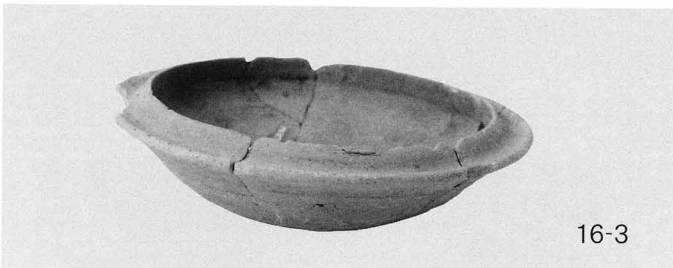
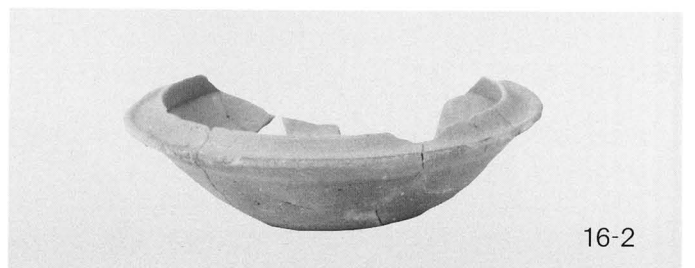
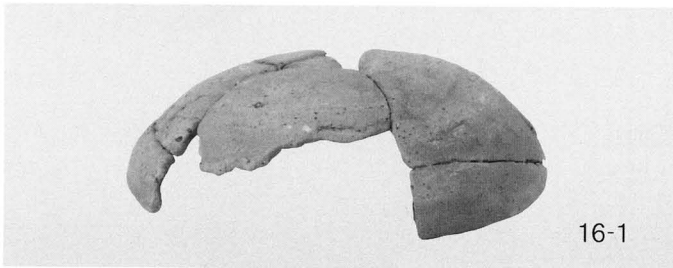
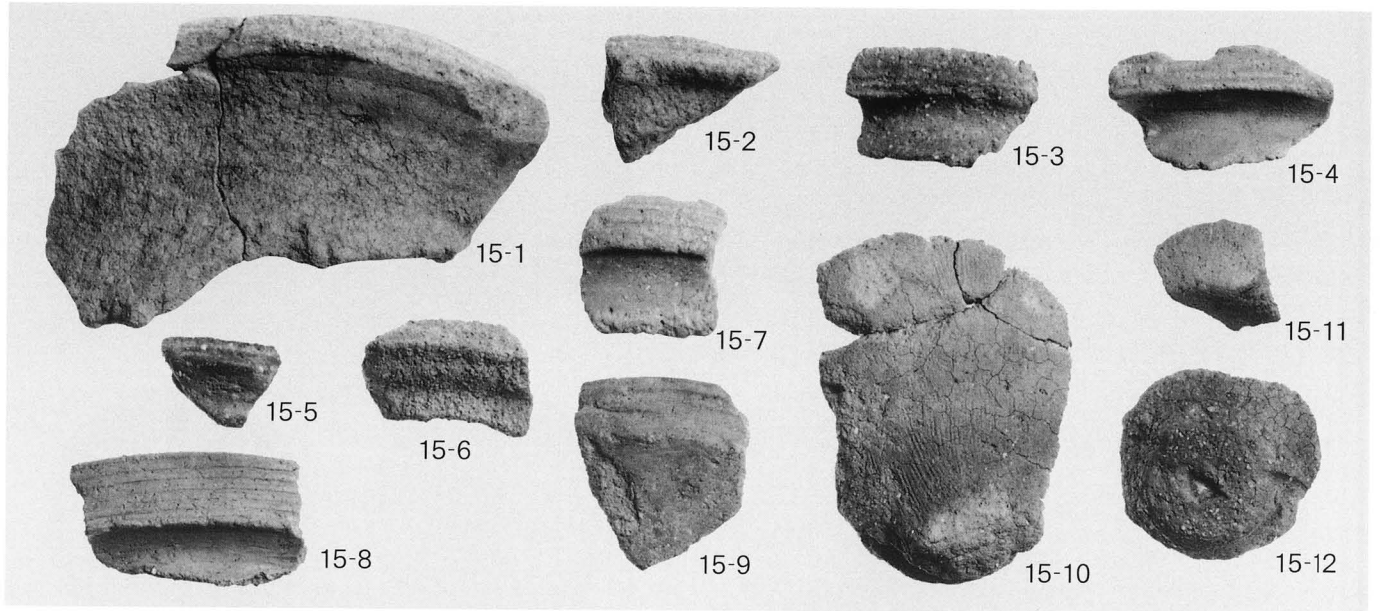
古山道出土遺物





古山道出土遺物

图版 12 (I 区調査区)



遺構外出土遺物



Ⅱ区 調査区全景 (東より)



Ⅱ区 調査区全景 (南より)

図版 14 (Ⅱ区調査区)



SI01 (北より)



加工段 1・2 (南より)



SK01 (東より)



SK02 (北より)

図版 16 (Ⅱ区調査区)



SK03・04・05 (北より)



SK06 (東より)



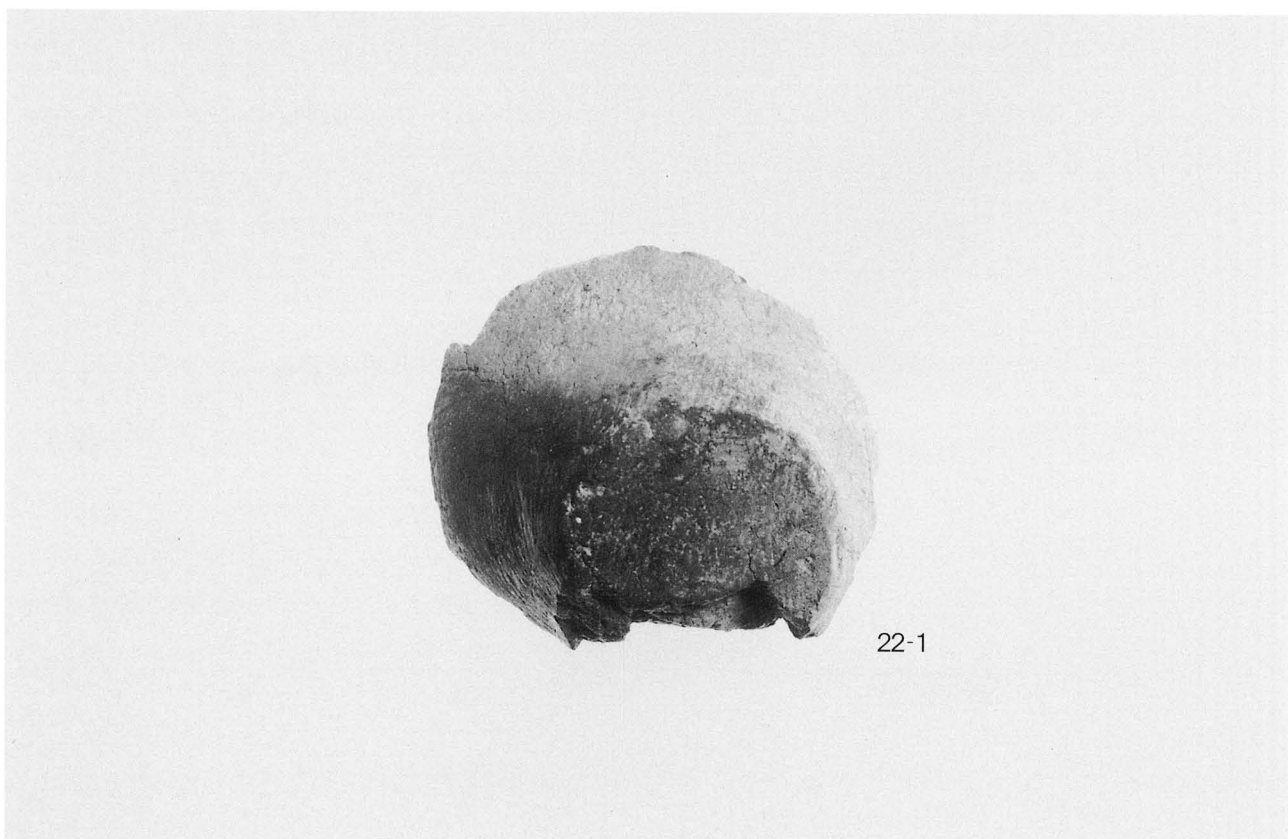
SK08 (東より)



SX01 (北より)



作業風景



SI01 出土遺物



# 報 告 書 抄 録

ふ り が な	こじょうやまいせき (いち・にくちょうさく)						
書 名	古城山遺跡 (I・II区調査区)						
副 書 名	主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設 (改良) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻 次							
編 集 者 名	松本 浩						
編 集 機 関	東出雲町教育委員会						
所 在 地	〒 699 - 0192 島根県八束郡東出雲町大字揖屋町 1142 番地 TEL 0852 - 52 - 6713						
発 行 年 月 日	平成 18 (2006) 年 3 月						
所 収 遺 跡 名	所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)
		市町村	遺跡				
古 城 山 遺 跡	島根県 八束郡 東出雲町 大字 出雲郷	32304	E51	35度25分 31秒	133度7分 47秒	平成 15 年 11 月 1 日～ 平成 17 年 6 月 30 日	1120.89
調 査 原 因	主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設 (改良) 工事						
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
古 城 山 遺 跡	散布地	弥生・ 古墳時代	住居跡 加工段 横穴墓 古山道 土壇		弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 鉄器 陶磁器 石器		

# 古 城 山 遺 跡

( I ・ II 区 調 査 区 )

主要地方道大東東出雲線出雲郷工区新世紀道路建設  
(改良) 工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年3月

発 行 島根県松江土木建築事務所

東出雲町教育委員会

印 刷 有限会社松本印刷